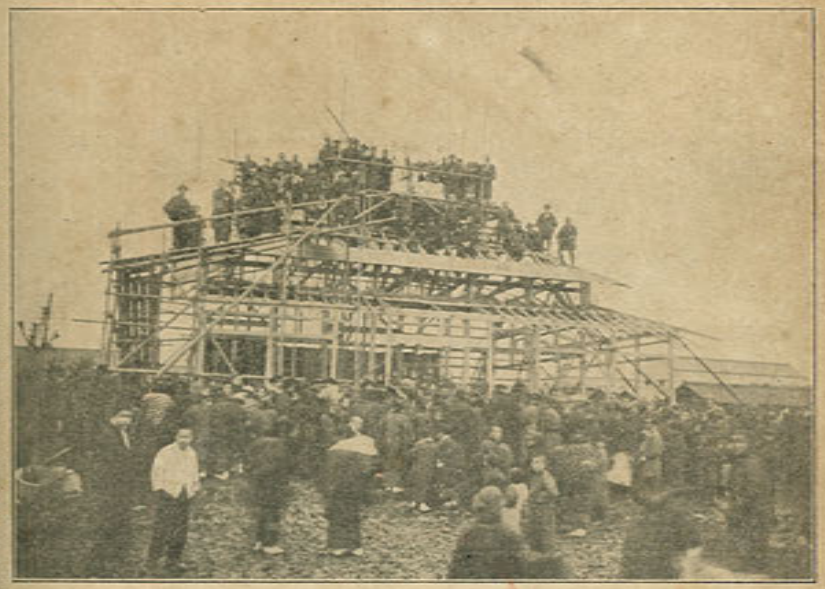
目次

健全思想とは何ぞ（法體）……本多日生
一、健全と不健全……二、裁判の標準……三、疾病同源……四、現代の病弊……五、宇宙觀と健全思想……六、人身觀と健全思想……七、國家觀と健全思想……八、人道主義と健全思想……九、社會觀と健全思想……十、富者の反省……十一、貧者の病弊……十二、貧富互助の社會
教育勅語と思想問題……本多日生
本教祖書要文講義……本多日生
日蓮聖人教義綱要……井村日威
宗門・史料……山根青村
社會改善と宗教の價値轉換……兒玉常宣
記事報道十數件

第廿五年五月號

大正十年初頭に於ける新寺建立



上圖は大正十年一月十五日三重縣四日市市に創建せられたる顯本法華宗安樂寺上棟式。下圖は同年同月三十日北海道札幌區に創立せられたる同宗顯本寺に於て挙行一圓支部發會式。

法幢

健全思想とは何ぞ

本多日生

目次

一、健全と不健全……二、批判の標準……三、疾病同源……四、現代の病弊……五、宇宙觀と健全思想……六、人身觀と健全思想……七、國家觀と健全思想……八、人道主義と健全思想……九、社會觀と健全思想……十、富者の反省……十一、貧者の病弊……十二、富貧互助の社會

一、健全と不健全

これより『健全思想とは何ぞ』といふ講題の下に、聊か所見を披瀝して諸君の御參考に供したいと思ふ。近來健全思想といふ言葉は汎く用ひられて居りますが、その內容に就ては未だ正確なる意味合が定まつ

て居らぬやうに思ふ、さうして世間に汎く用ひて居る意味は頗る狹義に解して居るので、不健全といふ事と健全といふ事は、極く僅かな問題に限られて居るやうに思ふ。不健全の思想といへば、歴史的に發達したる國家の存在を否認する、又歴史的に發達したる財産の分配を否定する――即ち今までの國家の組織を呪うて、一切の法律制度を破壞せんとするが如き思想、又今迄の經濟組織に於て認むる所有權を否定して、土地家屋その他財産の私有を認めないで、これを一般の共有に移さうとする思想、即ち無政府主義、共産主義、過激思想、社會主義といふやうな極端なものを指して、これを不健全といひ、左樣な思想に流れ行かない限りに於ては、凡べて健全といふやうな意味合に解釋して居る者が多いやうであります。尙ほ危險なる思想でもこれを學問として研究し、若くは自分が獨り左樣な事を考へて居る限りに於ては、別段これを不健全とは言はない、即ち大學の助教授がクロポトキンの社會主義を雜誌に書いた場合に於て、或る者が辯護して居る所に依れば、その思想は縱し不健全であつても、又本人がこれを正當なる理想と認め、何時かは實現せらるゝものと言つた所が、その位の事は宜いぢやないかといつて居るので、さうすると餘程ひどい事まで考へたり言うたりしても、それは未だ敢て不健全と言ふことは出來ない、そんな事を頭痛に病む方が不健全ではなからうかといふやうな事を言つて、今日は思想界に於て議論を闘はして居る。尙ほ或る者に至つては、如何なる危險思想と雖も、過激思想と雖も、亂暴なる思想と雖も、やりたいだけにやつて、そんな事を氣にしたりそんな事に引掛つたりしてはいけないから、好きな者は跳ねたり飛んだり勝手にさしたら宜からう、左樣にしても敢て影響を受けぬだけの社會を造るのが健全であつて、左樣な事を頭痛に病んで彼れ此れ言ふのは、それが不健全な頭腦であるといふ人もある。それを豪傑と考へられるやうにもなつて居るのである。左樣にして健全といふ言葉を互に使ひ合つて、極端な思想を有し、左樣な事を言つても、それを氣にする方が寧ろ不健全だといふ位まで、世の中は混亂して居る、それが所謂思想の混亂といふことであらうと思ひます。

二、批判の評準

何れが是であるか、非であるか、その人々に依つて判斷の標準が違ふやうになり、左樣な主張を振撒くやうになつて、一般の人は適從する所を知らぬのであるが、吾輩をして言はしむれば、左樣な事象の全體が不健全と認むべきであらうと思ふ。

それで自分共即ち宗教の立場、高潔なる道德の立場、高き〳〵考より申す時には、殆ど世の中で健全と許されて居る事の總てが不健全と思ふのである。又左樣にして不健全の範圍を擴げて、彌が上にも健全、健全の上にも健全を期するのでなければ、高等なる思想運動は起らないと思ふのであります。自由主義などを尊んで、「何を言うてもそれは別段不健全とは言はれない」といふやうな事は、政治上の壓迫に對する反抗として起つた一種の思想であつて、高等な宗教とか道德とか哲學とかいふものから觀た場合には、そのやうな粗雜なものを以て、健全とか不健全とかいふ標準にすることは出來ないのである。若しも佛陀の覺を標準にするならば、總ての凡夫は不健全なりといふことになるのである、聖人の教を本にして考へる時も、小人―道を學ばざる者は皆これ不健全なりといふ斷定に歸するのであつて、その健全といふ事の標準は益〻高く、益々森嚴であり、大先生でも不健全といふ非難を受ける程なる高潔なる標準を立てることが、私は文明を向上せしむる所以であると思ふ。それと健全不健全といふ標準を低い所に下げてしまつて、

何を考へた所が構はない、食ひたいといふのも人間當り前である、泥棒がしたいといふのも錢が無ければ尤である、夜這に行きたいといふのも性欲の赴く所敢て不健全といふこともない、人を殺したといふのも あの男の氣象としてはありさうな事だ……といつたら何も彼も健全になつてしまふ。所が左樣にして標準を引下げることを以て豪傑と思つて居る者がある、「どうせ人生浮世といふものはさういふものだ、その亂雜な所があるのが人生といふものぢや、それを達觀しなければならぬ、それを氣にするのは神經病みて、それが不健全だ」といふやうな事を言ふ。斯樣なことに依つて今日思想を判斷するの標準が無くなつて來た、標準を失つた事がこれが不健全なる文明であるのである。一方が物さしを持つて來て「それは短かいぢやないか」と言ふ、「馬鹿な事を言へ」と言つて勝手に懐中から別な物さしを出して、「それ見ろ、是でも尙ほ長いぢやないか」といふやうなもので、どの物さしが本當のものか分らぬといふことになる、それが即ち批判の標準を失うて居るのである。そこに道德の規範なく、哲學の理法なく、宗敎の信念なく、人はやりたい放題にやつて、その非を知らぬといふに至つて、世は即ち溷濁になつて來るのである。故に多くの左樣な豪傑を氣取り、知りたげなる顏をして議論を吐いて居るやうな、俗論に迷うては成らぬと私は考へるのである。

譬を以て之を言へば、人間の身體が健康であるといふことの標準を何處に置くか。假令病氣に罹つて居つても、後に恢復する位の者は健康體ぢやないか、醫者が危篤いと言つて見た所が、最後死なないで難るのは、何處かに健康な所があつたからだ、カンフル注射をした所が、死んでしまはない間は未だ健康體ぢや、不健康とは言へない、不健康のやうな狀態に見えるけれども實はそれが難つて來るのだから健康體である……斯ういふことになれば死んだ者のみ不健康であつて、生きて居る限りはどんなヘナ〳〵になつて居る者でも健康といふことが言へる。さういふ風に健康を擴げてしまへば、生きて居る人は皆健康といふやうな事になる。であるから醫者の方から言うたならば、病氣を重く見て、素人が考へては病氣でないやうな場合でも、醫者の方からは「イヤ是は病氣である、用心しなければいかぬ、酒も愼まなければいくまいし、大食もいくまい、夜遊びもいくまい」といふやうな色々の警告を與へられるのである、それが本當の話だらうと思ふ。素人同志が寄つて「ナーニ少々位の病氣は一パイ飲めば癒つてしまふ、風邪引いたつて氣にすることは要らぬ、風呂に入つて鷄卵酒でも飲んで元氣を出せッ」……といふやうな荒療治の方法もあるけれども、醫者に聞けばさういふことは言はないので、多く素人が左樣な事を言ふのである。それで正確に身體の健康不健康を論じたならば、吾輩のやうに斯く活動して居つた所が、之を醫者に見せれば、或は胃が弱つて居るとか、氣管に充血して居るといふので、「少し喋べらぬやうになさつた方が宜からう、食物も成べく軟かい物を召上つた方が宜からう」と醫者が言ふだらうと思ふ。その醫者の言ふ方が本當なので、こつちは實は不健康であるけれどもまア我むしやにやつて居るといふやうな譯であらうと思ふ。

三、惑病同源

故に思想の問題もさういふ風に「その位の事は不健全と言うてはいくまい」と言つても、この思想を診斷して所謂人心を善導する所の精神の醫者の方から言うたならば、又佛樣や日蓮聖人のやうな良醫の方から言うたならば、殆ど診斷する人みな精神上の病を有つて居らぬ者は無いといふ譯であらうと思ふ。耆婆といふ人は印度の名醫であつて多くの病人を癒した、それ等の人が皆悅んで健康になつたといつて耆婆の

前に禮を逸べた時に、耆婆が言ふには、それは身體は健康のやうになつて居るけれども、精神が健康でなければ人は健康といふことは出來ない、身體だけが健康であつても精神が十分に健康にならぬ限りに於ては病人である、病氣といふことは出來ない、身體と精神と二つ分離出來ない、本當の人間の健康といふことは精神も健康でなければならぬ、例へばヒステリーといふやうなものは肉體上に何處も故障はないのであるけれども、神經衰弱であるとか、精神に於て心配性であるとかいふことで病氣になつて居る、或は腹を立てないでも宜い所にむやみに癇癪玉を起すといふのも、神經が亢進して居るのであるから、それはやはり病氣である。左樣にして精神の病氣と肉體の病氣とは、さう分離出來ない、そこで「惑病同源」といふことは佛教に於て盛んに說いて居るのでありまして、原坦山老師の如きは多くの演說をした人であるが、生涯何時の演題でも斯ういふことを掲げて居つた、「惑」といふのは心の方の病氣、「病」は身體の方の病氣であるが、それは「同源」といつて一つの源から出て居る、身體が惡ければ心も惡い、心が惡ければ身體も惡いのであつて、この心と身とは全然分離し得ざるものであるが故に、眞の健康とは心まで這入つて行かなければならぬ。斯ういふ意味を耆婆が多くの者に言うて聞かして、お前等は身體さへ達者になれば健康と思ふけれども、精神の病氣は未だ殘つて居る、それは俺の手では癒すことは出來ない、心のお醫者はお釋迦樣であるから、是から佛樣の所に行つて心の病氣を癒して貰へと言つた。すべての患者は悅んで佛樣の所に行つて精神の病氣を癒して貰つたといふ事があるが、その通りに精神の病氣といふものは殆ど有たぬ者は無いので、敎に依つて修養を積まぬ限りに於てはみな病人である。法華經には「閻浮提の人は病の身なり」とあり、又「此の經は閻浮提の人の病の良藥なり」と說いてある、日蓮聖人も、「閻浮提の人は皆これ病の身なり」と言はれたが、斯樣にして人生は身體も弱いものであり、心も弱いものである、故に身體に就ての生理衛生も大事であるし、精神に就ての修養、精神の養生といふことも大事なのであると、十分考へて行かなければならぬ。それを輕受合ひをして、身體も達者である、心も達者であるといふ風に、所謂慢心な文明を造るといふことは、私は頗る危ないことであらうと思ふ。

四、現代の病弊

凡そ道德に於て反省を說き、宗敎に於て懺悔を說くのは、己れに省みて、自分は洵に淺ましいものである、詰らぬ者であるといふやうな、一つの慚愧の心、廉耻の心があつて人間は向上するのである。俺は立派な者である、俺はえらい者である、俺の頭を誰も抑へる者は無いといふやうに考へて、所謂我慢邪慢增上慢といふやうになり、さうして「自分は詰らぬ者である」と言ふ時でも、詰らぬといふことに慢心を加へて、「エーどうせ私は詰らぬ者ですよ」ナンと言ふやうになる。左樣にして如何なる場合にも敎を受入れることの出來ないやうな社會を造る——今日は確にさうでせう、我慢邪慢增上慢の輩のみ多くなつて、上も下もみな慢心に陷つて居る。選擧の時を御覽なさい、「俺くらゐ偉い者は無い、是非俺に投票ろ」と言ふ、或は自選投票と言つて、「議員になるべき者は俺を除いて外には無い」と言つて、自分が自分を投票するやうな事が平氣で行はれて居る、誰も彼もがみな俺だ〳〵と言つてやつて居る。左樣な、今の文明を良いやうに考へて居る者が多いけれども、完全なる理想の文明とは思はれない、一種の變態であらうと私は思つて居ります。

五、宇宙觀と健全思想

然らばどういふ事が健全かといふ標準を定めることは、中々困難なことであらうと思ふ。ただ思ひ當つた事で今日認められて居るのは、宇宙觀の方に於ては唯物論――神も無ければ佛も無い、宇宙は唯だ物のみ、その運動は機械的であつて、どうなるも斯うなるも別に何も意味の無いものである、打つかつた奴が損ナンであるといふやうな風に、この大宇宙に對して何の意味をも認めない、自然である、偶然である、犬も歩けば棒に當るといふやうな譯で、何が出て來ても、出て來ることに意味があるものぢやない……といふ風にこの宇宙を觀る。宇宙には唯だ物體の運動あるのみ、色々の機械がガラ〳〵と廻つて居るのみで、それに觸る奴は殺されて行くし、都合好く使つた奴はうまい事をするのだ……といふやうな譯で、世の中を冷かに見て行く思想、それが哲學上に於ては不健全なる思想であらうと思ふ。健全なる思想は宇宙に大生命のあることを認め、神ある事、佛ある事を認めて、この宇宙には大なる目的があつて進みつゝあるものである、即ち神道で言へば神樣を認め、佛敎で言へば佛樣を認め、儒敎で言へば天道を認めて、そこには偉大なる目的の爲めに宇宙が動いて居るといふ風に、この天意を畏み、神佛の思召を奉じて行く精神が無い人は、如何なる學者でも不健全なる人と謂はなければなるまいと思ふ。これは一國の總理大臣を勤めて居る人でも左樣な頭腦の人もあるし、大學の總長を勤めて居つて唯物的の頭腦もあらうけれども、吾々佛敎を奉じ、釋尊の御敎の下に於て健全不健全を判定するならば、左樣な總理大臣でも、大學總長でも、これ皆不健全なる人――斷見の外道と謂はなければならないのである。

六、人身觀と健全思想

それから人身觀として考へて來る時には、人間の魂の問題を輕く見て、魂がどうして存在して居るかといふことを考へない、あるものか無いものかも後廻しにして、「まあ生きて居るといふんだからあるのだらうと思ふけれども、死んで消えてしまふ所を見ればやはり無いのかも知れない、有る物が無くならぬといふことは俺も信じて居る、それは科學の上で信じて居る、有が無に歸するといふことは無い、だから死んで無くなることを思へばある時が既に無いので、今日魂があるとか、生きて居るとか思つて居ることが、これが騙されて居るのかも知れない」……といふやうな風に、自己の心の存在を疑つて掛かる、そこで親父の頭を打割つたのも兎を割つたのも同じに考へるやうになる。左樣にして人間の魂の問題を馬鹿にして、「魂なんといふものゝ事を考へる者は閑人である、それより吾々は腹が空つて來るからパンを求めよ、パンを得るが爲には權利を主張せよ」といふことになるから、そこで勞働問題、普通選擧といふやうな事は非常に大事なことで、パンの問題を解決するには此處から行かなければならぬ、魂の行衛ナンといふことを心配するのは昔の文明、舊い文明である、今日の新しき文明は即ち胃袋の爲に鬪ふのである、魂などは無論胃袋の奴隷である、胃袋が腹へつたといふことを言はぬ限りには、吾々は稼ぐ必要もなければ働く必要もない、吾々が日々この混雜する電車に乘つて殆ど命懸けで營々役々として働くのは、畢竟この胃袋の要求に應へんが爲である。モウ一つ胃袋に劣らぬ要求がある、それは異性に對する欲望である、即ち男子でいへば睾丸より起る所の欲望である、これが中々猛烈な勢を以て起つて來る、是の要求にも應へてやらなければならぬといふことに依つて、人間の生活を幸福ならしめるといふ、幸福とは何を意味するかといへば、胃袋の滿足と睾丸の滿足である。新しき文明といふと非常に立派なやうに聞えるけれども、その内容を分解して、今日の所謂幸福といふことは何であるかといへば、この二點に歸着するのである。それ故に彼等

は食物の方の問題が無くなり、畢丸の方の問題が無くなれば、最早世の中に論ずべき事はない、欠伸でもするより外に用はないと考へて居る、變な動物が殖えたものである。

左樣にしてこの魂の存在をも考へず、魂の價値をも考へずして、唯だ胃袋の要求と畢丸の要求に依つて動かんとする者、之を不健全なる人と謂はなければなるまいと思ふ。無論胃袋の要求を絶對に拒絶するといふことは出來ぬけれども、その爲に精神が奴隷になるに於て、そこに不健全の意味があるのである。精神の力に依つて行く時には胃袋の要求を抑へることも出來る、その採用すると否とは精神の判斷に委せる、少しは飢じくとも泳へて居れ……所謂武士は食はねど高楊子で、腹はへつてグー〳〵鳴つて居つても、「ナニッ」と忍耐して、食物などは後に廻して精神で活きるといふやうな意味が加はつて、初めて尊とい生活が營まるるのではないか。

七、國家觀と健全思想

それから又國家觀に就ては、現今いろ〳〵な思想が起つて、個人の權利、利益の觀念が高まつて來て、自己に利益を與へず幸福を與へないやうな國家ならば、存在を認める必要はないといふ風に、總てを自己の福利から判斷して、國家を輕く見て行く、己れに都合が好ければ之を認めるし、都合が惡ければ認めぬと言はんとする思想、隨つて國家の法律及官吏の權力を罵つて、直ぐに官僚であるとか、官權濫用であるとか言ふ。現に昨春芝公園の大隈侯の銅像の前で集合したあの普選運動の時に、探偵が書生に變裝して其樣子を探つて居つた、それはその間に何を計畫して居るか分らぬ、多くの群衆の集りの果が、遂に建物を燒くとか暴行を働くとかいふことに趨らうとするやうな事はないかを偵察せんが爲に、探偵が學生の服裝をしてその中に混つて居つた、その探偵を高い臺の上に載せて帽子を取らせてペコ〳〵謝罪らして、さうして高聲を呼んだ事があつた、その探偵は百姓の風をしやうが、學生の風をしやうが、坊主の風をしやうが、物を探る爲には何も不都合はないのである、それを探偵が學生の風をして居つたからといつて、非常な大事件のやうに騒いで居る。斯ういふやうなのが、不健全なる思想であると思ふ。國家が國權を行使せんが爲には、無論警察としては探偵を行使しなければならぬ、その探偵が百姓の風をしやうが、學生の風をしやうが、それを捉へて謝罪らすといふやうな事をやるのは、非常に間違つた觀念である。それを面白がつて大勢がワッと言つて、「今日は面白かつた、巡査を謝罪らしてやつた」といふやうな事を言つて悦んで居る。假令一巡査と雖も國權を行使して居る、即ち安寧秩序を維持し、良民を保護せんが爲に働いて居る、その權力を呪ふといふやうな事が、往いては國權を弱めて行く觀念である、即ち個人の權利を高めるに反比例して國權を弱めんとする思想、是が不健全であらうと思ふ。

八、人道主義と健全思想

又一方には世界の人道といふやうな言葉が起つた時に、世界の人類全體の幸福は大きい、國家の存立とか國民の幸福は小さいといふので、即ち四海同胞主義であるとか、人道主義であるとか、博愛主義であるとか、基督教の教義のやうな意味合で行くとき、その基督教を信ずるが爲に——人道を奉ずるが爲に、國家の存立を無視するやうな考になつて行く者、これがやはり不健全な思想であらうと思ふ。ボルシェヴイズムのやうに直接の行動に依つて國家を破壞しやうとしなくても、國家の存立が一概に人道に害があるとか、四海同胞主義に害があるといつて、國家を弱めるやうな言論行動を執る者は、どうしても不健全と謂はな

ければなるまいと思ふ。その位の事は思想の自由だからといつて許すことになれば、國家は立たぬ、今日の文明に於ては國家の力を强めて行かなければ、國民の幸福も得られず、又世界の文明に貢献することも出來ぬ、國家の力が衰へてしまへば、終には世界の御厄介になる譯であつて、少しも世界に貢献することは出來ない。人を救はんとするには先づ自ら健全でなければならぬ、世界の文明に貢献せんとするには國家が健全でなければ、却て御手數を掛けるやうな事になるのであるから、外世界の爲に考へても、內國民の爲に考へても國家の健全なる發達を忘れてはなるまいと思ふ。又如何に高く見える理想でも、國家を通さんければ實現されぬものである、宗教の理想は高いけれども、國家が滅びてしまへば隨つて衰へる。國家は倒れても宗教は遺るといつたのは昔のことで、今日は宗教どころではない、その國家が倒された時には、その國の道德、習慣、甚しきに至つては言葉までも變へられてしまふ。それであるから國が破れてしまつてもその國の宗教が遺るとか、その國の道德が遺るといふことは言へない、日本のやうな穩かな國が朝鮮を併合しても、之を日本化せんとするのは已むを得ぬことである、況んや宗教の觀念を異にし、道德の思想を異にしたる國が破れた時には、直ちにそれを變へやうとして來る。それは日本が露西亞の爲に敗れた獨逸の爲に敗れたと假定したる時どうであるか、彼等は必ずや日本にやつて來て、偶像を祀つて居るのはいかぬ、釋迦の像などはいかぬと言つて、佛像などは片ッ端から叩き壞すやうな事をやつて、佛教の信仰を特に壓迫するであらう。一遍に嚴禁しなくとも、佛教を信ずるやうな者は相當なる位地には就けない、役人にしても小使より上にはしないとか、軍人にしても軍曹より上には昇げない、會社員になつても二十五圓より月給を昇げないといふやうな事を、內々決めて置くものであるから、さうすると自から佛教を

捨てるやうになる。そこで「是は何もこつちから捨てろと言つたんではない、勝手に捨てゝ來たんだ」といふやうな事で、うまく係蹄に陷つてしまふ。「私は今度佛教を廢めました、佛壇を燒いてしまひました」「さうか、それぢや月給を五十圓にしてやる」……といふことになるから、皆やられてしまふ。色々の手段に依つて終にその國の宗教でも道德でも、風俗習慣でも、みんな變られてしまふものと見なければならぬ。それ故に國が亡びても宗教が存在するといふやうな事を考へたのは舊い頭腦である。それは若し舊の宗教が遺つて居り、道德が遺つて居つたとしたならば、どうしてもそれを征服したる者が統御がしにくい、假に日本を何處かの國が征服したといふ時分に、大和魂が遺つて居つて、何處までも神ながらの教を守つて皇室の尊嚴を考へ、命に代へても之を恢復しやうといふやうな精神が起つて來ては、統御に困るから、そこで伊勢の太廟も打倒し、日本の歷史も抹殺してしまつて、何時とはなしに大和魂を變へて、これを豚の魂にし、猫の魂にするやうになるのは、必然のことであらう。

左樣な譯であるから、國が亡びても道德なり宗教は遺るといふやうな事を言つたのは嘘である。國家の勢力が衰へたる時は、併せてその國の精神的文明も葬むり去られるのである。殊に日本がやられたならば、世界の二大文明の一たる東洋文明の全滅破產であります。東洋に於て確かり獨立を保持して居るものは日本である、東洋は人間の數から言へば世界の人類の三分の二を占めて居るものだけれども、併し印度といひ支那といひ、皆な獨立の力は弱くなつて、支那は表面獨立はして居るけれども、色々の國の勢力均衡に依つて、あちらから突張をかい、こちらから突張をかつて倒れずに居るのであるけれども、その支へてある棒を取つたならば、支那それ自身は獨立し得て居らぬものであらう。それ故に日本が滅びて支那の領土保

全を唱へる者が無くなつたならば、一方の突張が倒れた譯であるから、それが倒された時には、支那はドサ〳〵ッと亡びてしまふものだらうと思ふ。日本が倒れ、支那が倒れ、印度はあの通りであつたならば、東洋は全滅である、これ等の國々が全滅したる時、東洋の道德、東洋の宗教――吾々の先人が開拓したる數千年間の東洋の偉大なる精神的文化は、泥土に委するものと考へなければならぬ。それを生溫い言葉に騙されて、「國は亡びても教は存する、印度は亡びても佛教があるぢやないか」と言はれて成程と思つたり、「元の主人は捨てゝも俺が又可愛がつてやるから」と言はれてペコ〳〵附いて行つたりして、それで終ひには非常な殘忍な目に遇はされるのである。國家が亡びたる時の憫れなる有樣は、昔も今も變らない、殊に今日は一層亡國の慘狀は烈しいのである、その國は再び起てぬやうな目に遇はされる、幾ら稼いても高い稅金を取られて少しも頭が上らない、それこそ勞働問題などで今日騷いで資本家を呪ふけれども、今日の資本家よりもモット〳〵横暴なるものが、他の方面に於て現はれて來るのである、その時は資本家も勞働者もない、國民全體が生血を吸はれてしまつて、ヘナ〳〵になるのである、之を國家の獨立を失つて居る國に就て考へたならば、資本も勞働もない、國民を擧げて總て悲嘆の涙に咽んで居るのであります。それ故に國家の存立を忘れて、左樣に或は同胞主義であるとか、個人主義であるとかいふ事を言ふ者は、悉く不健全なる者であらうと思ふ、飽までも國家の存立を認めて、健全なる國力を發揮するやうに心懸けて行く所に、健全思想が存して居ると考へる。

九、社會觀と健全思想

更に社會觀に就て考へると、世の中はどういふものであるか、今は世の中を生存競爭といつて、强い者勝といふやうに考へて居る、弱い者の肉は强い者が取つて喰ふに差支はないとして、殆ど畜生のやうに世の中を考へて居る。近頃それではいかぬといふ考が少し動いたけれども、實際は國際關係でもやはり弱い者は强い者に呑まれるといふやうな事で來て居る、國際聯盟が出來て弱國と雖も自主自決といふやうな事を言うて居るけれども、それはまだ表面であつて、やはり弱い者はそれとはなしに尻を抓られるから、自分の方から「認めました」などと言ふけれども、それは認めぬければ强大國からキュッと尻を抓られるから、已むを得ず表面では「宜しうございます」と言ふので、大國の方では、「これは俺が無理に强いたのではない、向ふが自ら宜しいと言ふからやつたのだ」といふやうなことで、表面は飾られて居るけれども、その自主自決は形式的であつて、その前には「尻を抓られて居るが故に」といふ前置が附くのである。決して左樣な表面の事例を以て判斷することは出來ない、やはり世界は强い力の爲めに壓せられて居るのである矢張り弱肉强食の狀態である。經濟の關係もその考が强い、資本の上に於てはそれが資本の横暴といふ言葉で言はれて居るが、今まで資本家がうまい事をして居つた、どうしても金が無ければ世の中はうまく行かぬといふ感じが强くなつた、どんなに働いても資金を有つて居る者には敵はぬといふので、資金が强い力を示して居つた、資金が我儘を働いたことは事實であらうと思ふ。その反動が起つて今日は勞力が代つて跋扈をせんとして居る、今までは資金が跋扈したけれども、今後は腕ぢや、「殴り倒せッ」といふことになると、資金を有つて居る者は腕も弱いし、數も少ないものであるから、殴り合ひとなれば逃げるより仕方がない、資本家は金を出して警察官なり軍隊を養成して、それで暴力を防がうとする、勞働者は人を恃まずに自から棍棒を提げ石を握つて起つ、今の世界の有樣は法律が支配して居るのでもなければ、道德が支配

して居るのでは無論ない、金力と腕の力が支配して居る、金力といつても、その金力が警察力なり武力なりを養成して居るのであるから、結局腕の力である、雇うてある腕の力と本人直接の腕の力との闘ひである、金持は自から手は出さぬけれども、腕の強い人を金で雇つて置いて、直接の腕で來る勞働者と戰はうとする。日本はそこまでに立至つて居らぬけれども、外の國では斯くして長くやつて來たのである。斯の如くに互ひに自分の權利を本位にして、弱肉强食といひ、或は生存競爭といひ、或は金力萬能といひ、勞力萬能といひ、それで闘ふ階級、戰爭の社會を現出して居ることは、すべて是れ不健全の現象なりと私は言ひたいのであります。學問上認めて居る生存競爭といふ――弱い者は强い者が呑んでしまふといふことも、人間の文明としてはどうも疑なき能はずである、金を持つた者が威張るといふことも無論いくまい、腕の强い奴が殴り倒して行くことも無論いくまい。であるからその腕力とか、金力とか、さういふものに依つて世の中を治めやうとするは、健全な文明でなからうと私は考へる。

然らば健全なる社會とは何ぞといへば、人間の社會には高き標準を認めて、如何なる者でも從はんならぬ所の道があり、教があり、社會を律する所の高い標準がなくてはならぬ。その高い標準といふのは、所謂共同生存が目的であるから、皆が處を得て悦ぶやうに、夫も妻も、親も子も、主人も奉公人も、すべて上下貴賤の別なく各々その處を得て滿足するやうに、共同の幸福が保障されなければならぬと思ふ。夫のみが都合の好いやうにして、妻や子供が虐げられることもいかぬし、妻が跋扈して山の神になつて、亭主がビー〳〵言つてもいくまい、社會はやはりその通りである、金持が威張ることもいかぬし、貧乏人が威張ることもいかぬ。大體威張るといふやうな觀念が、何れも間違の種である。それは今日勞働者が腕を揮つて愉快に思つて居るこの裏は、又廻つて自分の頭を肘突かれてギュー〳〵言ふ時が屹度來る。左樣な事をして人生といふものはうまく行くものではない。故にこの社會を闘爭に置いて見たり、生存競爭に置いて見たり、左樣な自分の都合の好い時には威張り倒して見るといふやうな事は、誰が威張つてもいかぬ、政治上の權力を有つて居る者が官權を楯にして威張ることもいかぬ、資本家が金力を頼んで威張ることもいかぬ、勞働者が暴力を振つて威張ることもいかぬ、坊主が宗教の勢力を得た時分に教權を頼んで威張ることもいかぬ、即ち羅馬法王のやうな事をして威張るのもいかぬ。威張るナントといふことを頭に置いて行くことは總べて間違である。これは悉く不健全と謂はなければならぬ。

十、富者の反省

それ故に如何なる地位に居る者も先づ自から反省して掛るといふ事が、私は健全を意味すると思ふ。金持は如何にあるべきかといへば、金を持つたからと言つて威張ることはいかぬ、幸にして自分は金を儲けて金持となつた、金持としての心得はどうしたら宜いか、自分に分らんければ之を善き先生に聽き、或は高僧に聽き、大政治家に聽いて、己れの態度を愼しまなければならぬ、金を得た以上に於ては一番に左樣な人の所に馳せ參じて、頭を疊に擦りつけてさうして教を聞くといふことを知らぬ限りに於ては、金持としての正しき資格の無い者である。所が金が出來ると直ぐ威張る、をかしなもので、金が出來ると逆も頭が下らなくなる、人から話を聞いても、「そんな話ナンどは聞くに及ばぬ、結局は金ぢやないか」といふやうな事を言ふ。隨分坊さんの中にもさういふ人がある、そんな事をグズ〳〵言うた所が駄目ぢや、結局は金ぢや……と言ふ人がある、私は永く闘つて來まして、私等の宗派の中にも左樣な議論が勢力を得た時

代もありましたけれども、絶對に私は反對をして、我が宗内に於ける金力派を撲滅したのであります、私の方の教團に於ては今日金のある者が威張つて居るといふやうな事はありませぬ。けれども他の宗派を能く調べて御覽になれば、「あの坊主は詰らぬ男だけれども、金を出すから相當の地位に置くのだ」と言つて、金で面を張つて居る坊主が幾らもあるであらう。左樣な譯で世の中に於ても今日金持を取持が爲に、金持が慢心をし跋扈するのである、之に石を打つけて教育するといふことは無論賛成出來ぬけれども、金持は自ら反省をして教を乞ふやうにならねばならぬ。或る時私が金持共に對して彼等の自覺反省を促す話をした所が、「そんな事は知つてます」と言つた、けれども實は知つて居らぬのぢや、彼等は即ち蟹も吐く、金持は割合に慢心であり、且つ嘘も吐く、癪病であり、卑怯であり、洵に度し難き點がある。金持は斯く反省せよ、「幸にして自分は金を得たけれども、金持といふ者は多く腐り易いものであるし、金持といふ者は多く慢心に陷るものであるし、又往々にして失敗に終るものである、所謂小人玉を懐いて罪あり——吾々が金を得た爲に更に墮落するといふことは、如何にも畏入ることである」と考へて、金持が一番に自から懺悔して掛かるやうになつたならば、それが金持としての健全思想といふものである、そこに行かない者は金持の不健全と私は言ひたい。割合に金持は不健全なる頭腦が多いです、それが世の中を毒するのである、今日の文明を禍ひする罪の半分、——この階級戰爭、勞働者の拔扈の罪の半分はどうしても金持が引受けなければならぬ。

それ故に何時の時代でも聖人賢哲が出てた時には、必ず金持に意見をして居る。お釋迦樣も富者長者に對する教訓は非常に多い、必ずや釋尊の說法の際には長者が詣てて色々教訓を聞いて居る。耶蘇もやはりさう言つて居る、耶蘇は、富める者の天國に入るは肥つた豚が針のめどを通るより尙ほ難いと言つて居る、金持が天國に生れやうとすることは、肥つた豚が針のめどを通るより難かしいといふのであるから、中々通れつこない、左樣な事を言ふのは何かといふと、金持は大いに反省しなければならぬと誡められたのである。釋迦如來もやはりさういふ事を言うて居られる、それは「長者の萬燈より貧女の一燈」といつて、長者が萬燈を點しても心が汚れて居るが故に大した功德にはならぬ、貧女が一燈を點してもその方が功德が多いといふことである、是も長者に對する森嚴な訓戒であらうと思ふ。或は又天上界は却つて三惡道に墮つると言つて、佛教では天上界に生れることを希望しない、天に生れる事を泣いたといふ話がある、釋尊の御誕生の時に人相を見た阿私陀仙人も、「嗚呼悲しい哉、自分は太子が成道せられるまで生きて居らぬ、死ぬるといふと今までの行の德に依つて天上界に生れる、さうして天上界の果報に憧憬れて毎日々々面白をかしく暮してしまつて、到頭終ひに果報が無くなつて、ひつくり返つて三惡道にどさんと墮ちるやうなことになる、洵に淺ましい」と言つて、天上界に生れることを寧ろ悲觀して居る。この天上界に生れることを悲觀するのは、人生で言つたならば、飽までも贅澤をして溫かい蒲團の上でぬくぬくと寢て、美味い物ばかり食つて居るといふやうな境遇になると、却て功德が積めないと云ふので、左樣な點を能く味ふことに於て、富豪の健全思想が生れて來るのであらうと思ひます。

十一、貧者の病癖

又貧乏人の方も餘程警戒をせぬと、「貧すりや鈍する」といふやうな事になる。又貧乏人根性といふ一種の妙なものがあつて、初めから僻んで掛かるといふやうな事がある、お寺の事でも、別に貧乏人は粗末に

するといふやうなこともないけれども、それてもちよつと忘れてお盆のお經に行かぬといふやうな事があると、「自分が貧乏したと思つて來て呉れないのてせう」と言つて怒鳴り込んて來る、「さういふ譯ぢやありませぬが、轉宅せられても別段あなたの方から御通知もないぢやありませぬか」「それは轉宅したつて通知なんかしませぬ」と言て威張つて居る、それぢや行きたくても行きやうがない。中々私は貧乏人にも一種の病氣があると思ふ。そこて貧乏した時には僻んだり拗けたりしてはならぬものだといふ事が、貧乏人の健全思想に就て大事な點てあらうと思ふ。まア色々あるけれども、餘り言うとやはり貧乏人は僻むから、宜い加減にして置く。

十二、貧富互助の社會

兎にも角にも世の中を造つて行くに就ては、双方が持ち寄つて工合の好いやうに——金持も前に申すやうな料簡になつて自から反省し頭を下けて掛かる、貧乏人も拗けた根性を適して掛かるといふ風にして行けば、圓滿なる社會が出來るものだらうと思ふ。金持は金を得て威張る、貧乏人は勞力を以て威張るといふことてあつたならば、何時まて經つても喧嘩の世の中となつて行く、左樣な喧嘩するといふことは不健全てある、如何に西洋の國々が皆この通りやつても、それは全部不健全になつて居るのてある、それは健全の世の中とは言はれない。人心が墮落する時には殆ど一萬人が一萬人まて墮落してしまふ、一萬人がまるつきり墮落しても、その位ならば別に惡い事てなからうといふけれども、さうてはない、健全なる者が無くなる時の勢ひといふものは實に恐ろしいものてある。密柑なら密柑が腐りかけたといふことになると、非常な速力て全部が腐つてしまふ、私がこの間長崎て密柑を貰つた、野澤少將がこの密柑はうまいから東京まて持つて歸らうと言ふ、私はどうも各地に立寄り且つ汽車の中を持ち廻つて居つたならば腐るだらうと思つたけれども、野澤閣下が是非共と言はれるから持つて來た、所が汽車の中にスチームが通つて居つて溫いものてあるから、大分軟かくなつて來た、「これは來たナ」と思つて居つたら、その次の日になつて見るとモウ半分腐つたのがある、段々と蔓延して私が大森の驛に着いた時分に見ると、殆ど皆なグジャ〳〵になつてしまつた。さういふやうなもので、ハテナ、腐りかけたナと思うと、初めは一つ二つてあるけれども、今度は一帶にズッと腐る、早いものぢや。モウ日本ても人心が腐りかけたナと思つたならば、初めは一人か二人だけれども、終ひには千人ても萬人ても一遍に腐つてしまふ、實に恐るべきものてある。それ故に社會の左樣に腐敗し墮落することを慨嘆して、何處からても喰止めなければならぬと決心してかゝるのが、最も大切な心掛てあると思ふのてあります。

教育勅語と思想問題

本多日生

(3) 宇宙法則律

第三には宇宙法則律であつて、是れは科學以下に天則が行はれて居るが如くに、科學以上の、眼に見えざる所の所謂道德的、宗教的、哲學的の側にも宇宙の法則のあることを知らなければならぬ。今の文明は科學以下に於て天則の存するを知つて居る、雨の降るとき戸外へ出たら濡れることを知つて居る、風の吹くとき戸を閉めなければならぬことを知つて居る、併しそれ以上は知らぬ……左樣な淺薄なる文明に甘んじてはならぬ。今謂ふ宇宙の法則とは左樣なものではない、所謂「見えざるを愼しむ」のである。人類が見えざるを愼しむことを知らなくなつた時、人類の文明は破壞に向ひつゝあるのであります。この事は惟神の教から見ても、聖賢の教から見ても、佛教から見ても、又西洋の健全なる思想から見ても古今東西みな揆を一にして居るのであります。この宇宙の法則律といふことは色々解釋の仕方もありますが、日本に於ては宇宙の精神は我が神樣に現れ、神樣の精神は皇室に傳はつて慈愛深き聖德となつて居り、又一方には稜威と現はれて冒すべからざる尊嚴となつて居ります。この皇室の仁愛と尊嚴との基く所は、則ち宇宙の法則に存するのであります。家庭に於ては父母が宇宙の法則に代つて、慈愛と威嚴とを以て如何に子が賢こくも親を侮ることを許さぬ、如何なる場合にも父母は慈愛の精神を捨てないといふ所に、天に代つて居る德があるのであります。後進、先進の關係もその通りであります、社會に先んじて生れ、先んじて進んで居る所の者は、やはり後進に對してはこれを啓發する所の慈愛を有ち、又後進に侮蔑せられないだけの尊嚴を維持する、而して後より進み行く者は先覺者の慈愛に感謝し、先覺者の威德に尊敬を拂つて行かなければならぬ、これを侮蔑するのは人類の社會を構成する所以ではありませぬ。國家も社會も家庭も皆宇宙の法則律より導かれて居るものである。それに反くのは恰も雨の降るとき戸外へ飛び出すやうなもので、づぶ濡になる、それでも構はぬと云つて行き居れば終ひには風邪を引く、風邪を引いても構はぬと言つて居れば今度はギャフンと死んでしまふ、死んではモウ「構はぬ」とも言へなくなつてしまふ。宇宙の法則に逆行する文明は破滅に向つて居るのであつて、膺懲の鞭を受ける。その最も明かなるものは露西亞である彼等は膺懲されて雨に濡れた、それでも構はぬといつて風邪を引いた、その内に段々熱を發して來る、「熱など構ふものか」と言つて居る内に、ギャフンと

參つてしまふてあらう、今度はモウ物を言はなくなる、それが彼等の末路である、左樣な愚な事を眞似てはならぬ。故に「見えざるを愼しむ」といふ事を更に大いに國民に徹底せしめなければならぬ。それは宗教を侮視することに依つて、この大事な宇宙の法が蹴れて來たのである。天則と言つても加藤弘之氏が言うたやうな、唯だ自然科學以下の事よりほかに天則が無いと思つて、天則の語に由つて宗教や哲學を侮蔑するやうな淺薄な誤れる天則が世の中に蔓こるのが、大いなる禍である。

教育勅語はこの點に於て洵に明かな事であつて、「德を樹つること深厚」と示されたのは、建國以來敬神の觀念があり、「正しきを養ふの心を廣め」と仰せられて、天意を重んじてお出でになつて居る。それ故に　先帝は五箇條の御誓文にも「天地の公道ニ基クベシ」と仰せられ、軍人への勅諭にも「天地ノ公道人倫ノ常經」とお示しになつて居る、その他御製に於ても、天地の公道或は敬神のことを示されたのが多いのであります、今の教育者がこの宗教的氣分を捨てゝ居るのは、先帝の思召とは大分距離があるやうに思はるゝのである。それは勅語を文字の上からのみ解釋して綜合觀察をしないから起る弊で、勅語の文面に十分明かに見えなくとも、他の御製なり詔勅なり日本在來の文化から考へたならば、疑を狹む餘地は無いのであります。寧ろ宇宙の法則を遵奉せざるは、勅語の聖旨に反く者なりと解釋して少しも差支ないと思ふ。

(4) 人間本性律

それから第四には人間本性律であります。これも倫理の根抵、思想の根抵として大事なことで、前にも申した通りに孟子は生涯性善を力說した、佛敎に於ては「悉有佛性」を高調し、人間には皆悉く佛性の有ることを論證しなければ一切の敎義は立たぬとまで言つて居る。又日本に於ても和魂といひ、大和魂といひ——大和魂が腐つては大變だ、和魂を發揮しなければならぬといつて、國民性は立派だと說くのである。「日本の國民性は劣等なものだ、表面を粉飾して置け」といふ事であつたならば、迚も日本の奥立を期することは出來ない。「大和民族の本性は斯の如く立派なものである、汝は今は墮落して居るけれども、それは未だ本性を發揮して居らぬからである」と言はれた時、そこに反省がなければならぬ。それを穢れた性質の出た時に、「尤もぢや〳〵、他の奴は僞つて銀紙を貼つて居るので、正直に行けばお前の通りぢや」といふやうな工合に、墮落を認めたならばどうなるか。所が西洋の文明はこれを認めるのである、近頃の「僞らざる告白」を讀んで御覽なさい、劣等な考の浮んだのを、耻づる所もなく書立てゝ居る、淫靡な考を臆面もなく言うて居るのである。東洋に於ては仁義禮智を本性として、人は禮を破ることを恥とする、所が近來はこれを虛飾だと言ふのである。東洋では「鼠すら皮あり、人にして禮なからんや」と言つて居るが、それを西洋では素つ裸の女を澤山書いて、これが文藝ぢや、美術ぢやといつて、お臀の描き方などを研究して、お臀を眺めて居る、さうして解つたやうな顏をして褒めて居るけれども、どうもあゝいふ文藝、美術は決して高等な思想ではないと考へる。やはり東洋の思想のやうに、人間の本性は仁義禮智を以て本とし、そ

こに明德があり、佛性がある、和魂があるといふことを、根抵として考へて行くが宜いと思ふ。

教育勅語はどちらをお採りになつて居るかといへば、「智能を啓發し」「德器を成就し」といふ事は如何にも東洋的思想から見て居られるので、これは和魂を認め、明德を認め、佛性を認められて居る、西洋で言ふやうな本能ナンといふことは決して勅語に於ては是認なさつて居らぬと思ふ。それ故に學者と雖も學問が自由だといつて、勅語の道德的教化の聖旨に反するやうな學說を臆面もなく吐くことは、勅語を遵奉せざる者と言ふべきである。人間の本性を間違へたやうな思想はこれを採用すべきでない。

(5) 文明目的律

次に文明目的律であります。凡そ物事を判斷するに方つては文明の目的を大體に見定めて、それに違反する行爲は惡なり、その目的に遵つてそれを完成することは善なりとして行かなければならぬ。然らば文明の目的とはどうかといへば、いろ〳〵議論もありますけれども、左程に難かしい事とも思ひませぬ、要するに正義を打建て〻相互の幸福を保全し、所謂文明の惠澤を共にするといふことであります故に、大體は人間の幸福は物質精神の兩方面が調節されて進んで行き、さうして自他協力して、互ひに相倚り相扶けて行くといふことが文明の目的であらうと思ふ、その場合には今のやうに利益を相爭うて階級の戰爭をしなければ文明が進まぬとか、或は外交に於ても種々なる權謀術數を事とし、或は又白哲人種は優等人種であつて、有色人種は劣等なるものであると云つて、人類に差等を設け、さうして白哲人種のみ或る特權を有するが如き解釋を爲すは、これは文明目的律に違反したる所の思想であります。如何なる者と雖もこの文明の目的に違反することを許さぬ、それ故に勅語に於ても、

之ヲ古今ニ通ジテ謬ラズ、之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ

と仰せられた、これは或る教育者が考へて居るやうな固陋な偏よつた國民道德だけをお示しになつて居るのではなくして、この事が即ち中外に行うて過ちのないものであるとお示しになつて居るのであります。この文明の目的から考へて參ります時、

我ガ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ、德ヲ樹ツルコト深厚

と仰せられた中に、私は文明の目的が明かになつて居ると思ふのであります。是は言葉は簡であります、我が建國史を見ますれば、日本は何を目的にして居るかといへば、人類の文明を大成するのが日本の天職であります。「日の本」といふ事も「中つ國」といふ事も、日本が國を建つる所以は、我が國民の爲ばかりではない、實は我が日本の國民は全部犧牲となつても世界の人類を救ふ程なる義俠心を有つて行かなければならぬのである。その意味は利己的なる國家主義でない、正義の理想を本とする國家であります。唯だむやみに犧牲になつてその國が潰れてしまつては、世界の文明に貢献する事が出來ないから、國威國光を輝かすために他と戰ふ事もなり、勢力を張る事もあるけれども、志を得たその時は日本が人道正義の保障者となつて、公平なる態度に依つて人類の幸福を保障せんとするものであります。

この意味に於て教育勅語は世界的であり、文明の

目的を明かにせられて居るものであつて、唯だ單に日本の國民を造る相對的の道德のみに止まるものではない。皇運扶翼の目的も唯だ世界と戰つて勝つといふ目的ではない、この皇室を戴いて世界萬邦に德化を布くのであつて、佛敎に所謂轉輪聖王の如き皇室であると理解して行かなければならぬと思ふ。

(6) 國家理想律

次には國家理想律でありまして、人間は個人の理想の自由を叫ぶのみでは事足らぬと思ふ。自らの發心に依つて、自らの理解に依つて、個人の小さな理想に引掛るやうな愚な態度は捨てゝ掛らなければならぬ。個人が一人で考へた位のことは先人も能く考へて居る。而も一人や二人が考へたのぢやなくして建國以來練りに練つて進んだものが日本の國家の理想となつて居る、所謂皇祖皇宗の遺訓にして子孫臣民の俱に遵守すべき所のものが定まつて居る。今更少しばかり考へて違つたやうな事を編出すことは、技業のことである、大本は上皇祖皇宗に承けて下子孫に傳ふべきものが凛然儼乎として定まつて居るのが我が日本國である。それ故に我國の國家理想を能く理解して、個人としての理想があつても、國家理想に稽へて逆行してならない、國家理想を達成する上の妨害となるやうな事があつてはならぬ。妨害しないのみではない、自分の力はどうぞ國家の理想を實現する上に幾分でも役立つやうに、あらゆる方面から國家理想に參加して行くべきであらう。皇運を扶翼すると云ふも、國家が有つて居る理想を輕んじたのでは意味を成さぬことになる、日本の天職理想を實現する爲に皇謨を繼承したまへる天子樣である、天子樣は大事だけれども國家理想は知らぬといふやうなことでは、國民の理解が足らぬのである。人格としては皇室を戴き、理想としては建國已來の皇謨を奉戴して、國家理想の下に躍進すべきである。我國の國家理想は頗る明白であつて、日月の光に比すべきである。敎育勅語にはこの國家理想を「宏遠、深厚」と仰せられて居るのである、故に勅語の聖旨に就ては「宏遠、深厚」の意義を鮮明にして參らんければ、今後の思想を導くことは困難であらうと思ふ、これも今日に於て大自覺を要する所である。

(7) 社會構成律

次は社會構成律でありまして、人間の集つて社會をなすや、無論相倚り相扶くるの精神を要す、この相資相扶の原理を實現して行くに就ては、穩健なる手段に依るのが當然であります。社會は有機體であり渾一體であつて、大勢が相集つて居り、その大勢の中に一種の生命を保有して居るのである。人間が相集つて社會を構成する以上は、相互に讓り合ふ事と相互に扶け合ふ事が無ければ、社會を組織することは出來ない、各〻自己の利益と權利とを鬪はして行くならば社會は破壞を免がることは出來ぬ、今日人類の社會が壞れずに保つて居るのは、今まで互ひに親切や讓り合ひて造つて來た過去の偉大なる文明の賜である、今日の如く各自の利益や、權利や主張したならば、到底社會の安定を保つことは出來ぬ。「俺は貴樣の事など考へて居りはせぬ、貴樣の隙を見てどつつ腹を扶つて引奪るぞ」「俺もさうだ」といふことになつたならば、どつちも枕を高ふして寢ることも出來ない、「貴樣先きに寢ろ」「馬鹿な事を

言へ、貴様から寝ろ」「貴様が寝たら時計でも墓口でも引奪つてしまふぞ」といふことであつたならば、迚も人間の平和な社會を成すことは出來はせぬ。平和な社會を構成するには、相倚り相扶けて行かなければならぬ。そこで社會主義者は相互扶助といふことを盛んに言ふが、彼等は扶助を言ひつゝも實際は階級戰爭を煽つて居るものである、彼等は能辯である、互ひに相扶くるの主義ならば、人間の精神を不平に導いてはならぬ、不平を懷かしたならば、仲の好かりし者も反目する、人間の心が荒らぐのである。人間の心を平和に導かずして、これを荒らげて不平に導き、險惡に導き、さうして鬪ひを挑ますといふに於て、如何して相互扶助を實現するか。嫁と姑とは仲好くせよと言つて置きながら、先へ廻つて嫁の所へ行つて姑の惡口を言ふ、「あんな根性の惡い婆はありはせぬ、あんたソンなにヘイ〳〵して居る事はない、たまには頭の一つ位殴つてやんなさい」といふやうな事を言ふ、今度は又姑の所へ行つて、「あんな惡い嫁はない、今にあんた酷い目に遇ひますぞ、寝て居る時に棒で頭をどづいてやんなさい」と言つて煽つて廻つて、さうして「俺は彼の家庭の平和を希望して居る」と言つたならば、隨分滑稽ぢやないか、「彼等は理想は善いけれども實現の方法が惡い」などと辯護をする者もあるけれども、その理想といふのも實は策略手段である、相互扶助ナンといふ事は唯だ彼等の口實である。されば論より證據、彼等が權力を得た時の實狀は如何、彼等が天下を取つた時何をやつて居るかといへば、先づ持權階級を打破するといつて富豪を屠り、宗教家を屠り、今までの人物を屠つて、そうして社會に功績あつた者をも侮辱する、學問の上の功勳者をも認めんければ、軍事上の功勳者をも認めぬ、經濟上の功勳者をも認めぬ、そんな者は要らぬといつて叩き捲つてしまつて、そうして今までのらくらして居つたやうな低能な、勞働者のみがえらいのぢやといふやうな事になつて居る。是は非常な不公平なことであつて、一方を虐げることになるのであります。それ故に虐殺に次ぐに虐殺を以てす、彼等が今天下を維持して居るのは暴力である、決して彼等の理想が善きために天下を有つて居るのではない。

それ故に先づ正しい意味の社會構成律から考へて行かなければならぬ。それには勅語にお示しになつて居る「博愛衆に及ぼし」或は「公益を廣め」「世務を開き」「國憲を重じ」「國法に遵ひ」といふ風に、秩序を守つて行かなければならぬ。さうして改善すべき事は順序を逐うて進んで行かなければならぬ、革命等といふ事を西洋でやるが、非常な間違つた事である。恰も人間にしたならば「此奴一つ焼き直せ」といつて腦味噌を取換へる樣なものぢや、「この親父少し癇癪親父だから取換へてやれ」といつて、頭を割つて内部の腦髓を取出して捨てゝしまふと同じで、佛蘭西革命が抑〻今日の禍ひの端を開いたと言つてよい、今日は經濟革命を叫んで居るが、終には平和の文明を呪ふ所の極端なる思想に迄行くのである。

大體我國の思想は、精神生活を重んじ、この勅語にお示しになつて居る通りに、皇祖皇宗の遺訓を奉じ、上御一人より不萬民に至るまで、拳々服膺し來つたのである「勞働者の道德である」とか、「何々階級の道德である」とか言つて、隅へ寄つて勝手な理窟を附けて歐り合をするやうな事は、勅語の聖旨で

はない、すべて社會を構成するには眞實に全般の幸福を理想し、さうしてそれは最も公平無私なる態度に依つて進み行かなければならぬ。それには極端なる平等はやはり私であります、人間は智能なり努力なりに優劣があるから、如何なる社會を造つても直ぐそこに差等を生ずる。今の露西亞がどうやつて居るかといへば、第一に勞働者に生活權を與へる、第二が何、第三が何、第四が何といふやうに階級を設けて居る、今までは國家の功勞者に就て階級を設けたのを、今度は生活權の上に階級を設けて居る、その他いろ〳〵の事に直ぐ不平等が起つて來るのである。それは自分の心でも、波立つのであるから、いくら平等にしたからといつても直ぐに差等を生ずる、例へば茲に百圓宛の金を平等に分配しても、一方は勤儉して二百圓に增殖する者と、三日經たぬ內に使ひ果たして仕舞ふ者との別を生ずる、平等にすると云つたら又その二百圓を取上げて同じやうに百圓宛分けてやらなければならぬ。それを何日目に平均するのが正しいとするか、翌朝すぐ又同じやうに百圓宛にしてやるのが正當か、一週間後が正當か、一年後が正當か、何時これを平均すべきであるか、何時平均しても直ぐ差等を生ずるではないか。

それ故に、無論餘りに貧富の懸隔を生ずるのは宜しくないが、それは政治の上なり社會政策の上から相當な方法を執つて行くが宜いので、急激なる變化に依つて平等を實現しやうとするのは、社會の平和を保持する所以でない。

(8) 溫古知新律

それから第八には溫古知新律であります。「古きを溫ねて新しきを知る」といふ言葉は、この言葉自身が餘程舊いことであります、けれども、私は今に尙ほ新しき意味を失はない格言だと思ふ。我が歷史上に發達した所の精神文化は、何處までも古きを溫ねて新しきを知るで、古きに泥んで新しきを斥けるのもいかず、古きを忘れて新しきに趨るのもいけない、過去の傳統的文明を尊重しつゝ、開發すべき所に開發進步を見て行くといふので、實に「溫古知新」といふことは善い事だと思ひます。

そこでこの教育勅語は「皇祖皇宗の遺訓にして」と言はれ、「爾祖先の遺風を顯彰する」と仰せられて居りますが、是は遺訓といひ、遺風と申せば唯だ古き所に基くやうであるけれども、それを溫ねて更に新らしきに向ふ意味のあるは申すまでもないので、五箇條の御誓文にも、

舊來ノ陋習ヲ破ツテ天地ノ公道ニ基クベシ

と仰せられて居る。即ち明治維新の大業を　先帝陛下がなさつた上から考へても、必ずしも舊來の陋習を墨守せよといふ事ではない、祖先の遺風と仰せられる中にも惡い遺風があつたならば無論改善して善き遺風を保存し、その善き遺風より新らしきものを開發して行くといふ樣な事は、もう論ぜずして明かなる事であります。それ故に今の思想界に於て唯だ古きに據るからといつて、日本書記の元に戻らんければならぬといつて、その後に發達した日本の文明を排斥せんとするが如き固陋なる態度、又新しきに行くからといつて歐米の思想界に起つた急激なる一端の思想を採るが如きは、是は無論間違ひである。飽までも我が歷史的傳統的の思想を整頓して、その中から開發して行かなければならぬのであります。

本經祖書要文講義

本多日生

五、結經　我れ今大乘經典甚深の妙義に依りて、佛に歸依し法に歸依し僧に歸依す。

この所は觀普賢經に示されたる三寶歸依の文てあるのて、最初に申した良醫としての本佛と、良藥としての妙法五字と、使を遣はすといふその本化再身の日蓮とが、壽量品より說き出さるゝ所の三寶てあります。その意義は壽量品に於て見ますれば、所謂甚深の妙義中の最高妙義として示されて居る、それに依つて三寶に歸依するのが日蓮の宗旨てあります。

六、壽量品　一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず、時に我れ及び衆僧俱に靈鷲山に出づ、我れ時に衆生に語る、常に此に在つて滅せず。

この所は三寶中に於ては、佛を更に中心にして考へなければならぬ、佛なければ說法なく、使を遣はすことなきが故に、三寶の中には佛を根本にしなければならない、法と言ひ僧と言ふは畢竟佛の敎ひの手てあつて、佛が敎を說いて救うたのが法となり、命令を發して門弟を遣はしたのが僧となつて居るのてあつて、佛なければ說法無く、使も無いのてあるから、三寶に歸依する中心を本佛に置くのが壽量品の思想てあります。それ故に一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まずといふ、その渴仰の心熟する時、本佛は弟子達を引連れて靈鷲山に出られるのてある、靈鷲山と申すは天竺の山を指す丈第てはない、即ち衆生敎化の爲に出られる所を申すのてあります。さうしてその說法の大趣旨は、本佛は常住不滅てあるといふ事をお說きになるので、一切經を一言にして申せば「我は滅せず」といふことてある、滅せざる中に總ての活動があるのてあります。丁度我が國體を天壤無窮といふが如きものてある、これは唯だ時が長いといふことてはない、その長き間に偉大なる事業が完成されるのてある、佛も不滅なるが故に佛事を行じて種々なる利益活動が起るのて、吾等はその不滅の如來に依つて救はれるのてありますこと故に、救ふといふ言葉は最早や要しないのて、唯だ「我は不滅なり」と仰せられた時、恰も母が「汝憂ふる勿れ、我は汝を離れず」と言つた時には、子供の安心が其處にあると同じてある。

七、神力品　要を以て之を言はゝ、如來の一切の所有の法、如來の一切の自

在の神力、如來の一切の秘要の藏、如來の一切の甚深の事、皆此の經に於て宣示顯說す、是の故に汝等如來の滅後に於て應當に一心に受持し讀誦し解說し書寫して說の如く修行すべし。

これは神力品の「四句の要法」と申して、上行菩薩に法華經を付囑するのには、擴がつた儘の法華經を與へたのではなくして、その肝要を結んで樞柄を乘つて之を授くと申して、最も大事な所を四つの言葉に結んだものであります。之れを天台は「名體宗用教」の五重玄義に解釋をされて居りますが、それはこと長き話になりますから略しまして、この經文の趣意を見ますれば、法華經と申しても皆如來の上から來て居るのである。一切の所有の法とある、宇宙に捨てられてある自然法ではなくして、如來が支配して居る所の萬有であります。又如來の有し給ふ自在の神力である、如來の秘藏されて居る所の大切なる事柄、如來の最も深しとせらるゝ所の事柄であります。これは何を指すかと言へば、天台は始めの「所有の法」は妙法蓮華經の名に於て之を見たのである、次の「神力」は即ち法華經の用と見て居る、法華經の用といふは取りも直さず如來の用である、眞言風の宗の用ではない、如來の活ける用をこの文字に單めるといふことである、文字神聖論にはあらずして、如來が文字に活ける佛陀の力を包んで活躍せしむるといふのであります。丁度聯隊旗の如きもので、聯隊旗の旗は織物の布片か何かで、それが直ちに價値は無いけれども、陛下の聯

隊旗を授け給ふ所の詞に依て聯隊旗に意義があるのである、妙法蓮華經の言葉がその儘意義があるのではない、佛が妙法といふ言葉に我が自在の神力も、我が秘藏の事柄も皆單めて與へると言はれた、その佛勅が意義を持つのである。若し聯隊旗を廢して他の物を以て今日の聯隊旗を重んずるが如くにする必要をお認めになつて、これに換へられたならば、その時は聯隊旗は何でもない物になる。若し妙法といふ言葉に換へるに他の言葉を以てするといふ本佛が教化をせられたならば、それはそれでも宜いのである、その言葉ばかりに拘泥することはない。けれども一旦法華經を說いて斯く定められた以上は、今釋尊は說法されないのであるからこれが變らないといふだけのものであつて、左樣な所に固陋なる見解を持つと、今後の思想界に於ては承服せざることになると考へるのであります。如來の實在は何處まで行つても宗教はこの點を支持することが必要でもあるし、若しそれが破れた時は最早や宗教は無いのであります事故に、如來の自在の力が妙法の中に包まれてあるといふことは、吾々は之を信ずるのであります。そのやうな事は信じないと申せば最早やそれ迄である、如來が斯くして與へられた事を奉ぜぬと申すならば、「この藥うまからずと思ふ人」と日蓮が言つて居るのでありますから、そこは最早や信仰の領域に入つて居るのである、區々たる理智の研究に於て批判すべき事柄ではない。

如來の一切の秘要の藏といふは、即ち因果の要路を指すのであつて、釋尊は一代の說明の要領を因果

に止められた。それがこの場合に於ては、普通に言ふ因果應報の理と言つて、斯の如き事をなした原因に依つて斯の如き結果があるといふだけのことではなくして、本質上から因果法を論じて來る、即ち佛性を以て「因」とし、その佛性の顯發せられて絶對の佛を「果」とするので、恰も十五夜の滿月は晴日の月の體そのものが現れたのであるといふ、非常に微妙な因果法を應用したので、詰り法華經の佛性論と本佛觀との二つが、如來の秘要の藏であります。所謂二乘作佛、久遠實成の二大教義が如來の秘要の藏となつて居る、それを妙法の中にその意味合ひを含めてある。蓮華といふもやはり因果の理である、本因本果の法門と申すのが即ちそれであります。

それから如來の一切の甚深の事と申すは、諸法の實相を指すのでありまして、即ち方便品に說かれたが如くに、萬有相關の妙理で、一念に三千を具するといふが如く、一切諸法微妙なる關係を有つて居る、その不可思議なる大眞理を指して居るのであります、即ち法華經に於て法體と稱して居るものを云ふのであります。左樣な眞理と、それからそれを實行に移して因果の關係からして實際にその覺を得て參ること、それを得せしめる所の如來の力と、左樣な事を纏めて呼びなす妙法蓮華經の名前と、それから斯の如き說明を與へて他の敎と違つた——阿彌陀經とか藥師經とか般若經と違つた意味合ひを玆に示して居ること、妙法蓮華經の名に本佛の自在力を入れ、其處に本因本果の要路を示し、一念三千の妙體を單めて、即ち名體宗用敎の五重玄義を纏めて、いま上行に與へるのであつて、その名は妙法蓮華經の五字、その內容はすべて如來の一切の……如來の一切の……と四句共に冠せられて、妙法の內容はすべて如來を載いてゝなければ說明は出來ないのである。それ故に前に申した眞言風の阿字觀的の文學最高思想でもいかなければ、阿彌陀如來の方から來た稱名行でもいかぬ、天臺の理智の觀念でもいかないので、絶對の本佛を奉じてそれを渴仰する思想が妙法を信ずるそこに直ちに現れて來るのであります。觀心本尊鈔にも妙法の有難い意味を說いては、釋尊の因行果德の二法は妙法蓮華經の五字に具足す、我等この五字を受持すれば、自然に彼の因果の功德を讓り與へたまふ。

と言ひ、又

佛大慈悲を起して、妙法五字の袋の中に、此の珠を裹みて末代幼稚の頸に懸けさしめたまふ。

と言はれたが如くに、總て佛に關する意識よりして、妙法五字が有難いといふことになつて來なければ、壽量品の意義にも合せず、神力品の意義にも合せず、全體法華經の經旨から離れて行つて、眞言の思想の方に墮落し、淨土の稱名行に墮落し、天臺の觀法の方に墮落するといふ事になるのである。それ故に壽量品の中心の意義、また神力品の四句の要法といふやうなことは、餘程徹底的に理解して置かなければならぬ。永らく日蓮の敎學をやつて居る人の議論と雖も、私が今申す事を能く理解せられてお聞き分けになつたならば、「ハハア、彼は不透明な頭腦で

あるな、未だ五里霧中に徨うて居るナ」といふ事が直ちに了解し得らるゝのであります。彼等が妙法と言つても、「法とは何ぞ」と言つた時に、之を實相の哲學的理法として説明するか、釋尊の説かれた教法として説明するか、又我等の當體を指す主我的の法として説くか、本佛の絶對の覺を抑へて説くか、又左樣な事に基いたる修行の心得を取るかといふ場合に、どれだか薩張り分つて居らぬ、實相の理をいふが如く、釋尊の教をいふが如く、何を法と指して居るのやら、唯だ法といふ言葉を濫雜に使つて居るのに過ぎないのであります。それでは少しも妙法ではない、混雜法である、彼等の思想は雜法とても言ふべきものである。斯の如きものを妙法といふならば、世の世は總て妙法である、如何なる混雜せる思想でも皆それは妙といふべきであるが、釋尊の教らるゝ妙といふは、左樣な混雜した思想を言ふのではない、總ての混雜せる思想をば開顯統一して來なければならぬ。開顯統一とは簡單に言へば能く整へて、之を捌いて纒りを附けなければならぬ、自ら奉ずる妙法が左樣な混雜に陷るやうなことでは、法華經の特色を失つて居ることは明かである。要するに日蓮の教學に志す者が不徹底であり懶惰であり欺瞞してあつた罪の致す所で、此非は先人を誘るにあらずして、日蓮聖人の功績を沒する如き虞あるが爲に、中古以來の學者の罪を鳴らしてその非を責めて差支へないものであると思ふ。又その流れを汲んで居る今日の不透明の人達も、この意味に於ては大いに反省してもらいたいのである。私は從來外に日蓮主義が發展するの時に內訌は避るが宜いと考へて、左樣な點を除り申し述べぬのでありますけれども、それは素から明かな事なので、今日自分の思想が進んだものでも變つたものでもない、最初より左樣な俗學俗論は皆物になつて居らぬといふことは、これはモウ學風の出發點からして分つて居るのであります。尙ほその意味は自分が今後生き長へますれば、漸次に鮮明にして置かうと思ふので、外に日蓮主義發展の時には內訌を避くるが爲に申さぬのでありますが、相當に日蓮主義が外部に發展した時は、驅つて內部を覺醒する爲に斯樣な俗論は一掃することに力を盡して見たい、又その時機の必ず來ることゝ思ふのであります。

それからこの中には五種の修行と言つて、受持、讀、誦、解說、書寫といふ五つがありますが、その中には受持の行を最も重しとするので、受持成佛とも申します。受持は信を以て受け念を以て持つと申して、信念の事に解釋されて居ります。最初お經に言つた一般的の意味は、受持といふ事はお經文を敎はつて忘れぬやうにして行く事で、その敎はつた事を記憶して行く事を受持と申したのであります、けれども日蓮聖人の解釋に於ては、さういふお經文を敎はつて忘れぬやうにするといふ事ではなくして、經文の事は全部讀誦といふ方に移して、受持は單純に信念を指されて居るのであります。この經を受持するといふのは、唱へ言葉は妙法蓮華經であるが、その內容は前の「如來一切の……」と言はれた四句の要法として、之を心得て行かなければならぬ、殊にその大事なのは自在の神通の力といふことを考へる時、これは如來の力である、故に「經力とは佛力な

り」と天台も申して居ります、「妙法經力即身成佛」といふ爲に、唯だお經をヂャブ〳〵讀む力だと誤解して居る坊さんが澤山ありますけれども、それは眞言の齋醮風の頭腦で、デビ〳〵とかロケ〳〵とかいふやうな發音に神秘的の力があるといふので、護符みたやうな風に考へて居るのであります、けれどもそれは法華經では取らぬのであります、法華經の妙法が有難いといふのは、左樣な護符であるとか眞言のデビ〳〵といふやうな事とは違つて、明かに意義の方から妙法の有難い事を說いて居るのであります。即ち前に本尊鈔を引いたのはそれであつて、この妙法は多くの場合には不可思議とかいふ言葉であるが、併し日蓮が今之を解釋して見れば、釋尊の因行果德の二法は妙法蓮華經の五字に具足すると申したのであつて、彼の解釋は日蓮聖人が非常な尊嚴な態度で、自分の衷心の思想を表白した言葉であります、決して他に對して一時的の言葉ではない聖人の自らの信仰告白であります。

八、涌出品　爾の時に佛諸の菩薩摩訶薩に告げたまはく、止みね善男子、汝等が此の經を護持せんことを須ゐず、所以は何ん、我が娑婆世界に自から六萬恒河沙等の菩薩摩訶薩あり。（乃至）是の菩薩衆の中に四たりの導師あり、一を上行と名け二を無邊行と名け三を淨行と名け四を安立行と名く、是の四菩薩は其の衆中に於て、最も爲れ上首唱導の師なり。

この涌出品は四菩薩の事があるのでありますが、これは迹化他方の菩薩の請を「止みね善男子」と斥けて、本化上行菩薩がこの世界に御座るといふので、之を召出されたのであります、さうしてその菩薩の中の四人の導師を上行、無邊行、淨行、安立行と名けるのであります。

この五、六、七、八の經文は三寶式に基いて擧げたので、五は大體甚深の妙義に依つて三寶に歸依するといふ總括的の文を擧げ、六は壽量品に依つて本佛を擧げ、七は結要付囑に依つて妙法の五字を擧げ、八は涌出品に依つて本化上行を擧げて、法華信者の歸依すべき三寶の根據を示したのであります、この四つの經文を以て宗旨の大事を代表せしめたのである。これより以下は日蓮聖人の聖訓であります。

九、觀心本尊鈔　其の本尊の爲體は、本時の娑婆の上に寶塔空に居し、塔中の妙法蓮華經の左右には釋迦牟尼佛多寶佛、釋尊の脇士には上行等の四菩薩なり、文殊彌勒等の四菩薩は眷屬として末座に居し、迹化他方の大小の諸菩薩は萬民の大地に處して雲客月卿を見るが如く、十方の諸佛大地の上に處するは迹佛迹士を表するが故なり、是の如き本尊は在世五十餘年にこれ無し、八年の間にも但八品に限る、正像二千年の間は小乘の釋尊は迦葉阿難を脇士と爲し、權大乘並に涅槃法華經の迹門

等の釋尊は文殊普賢等を以て脇士と爲す、此れ等の佛を正像に造り書けども、未だ壽量品の佛ましまさず、末法に來入して始めて此の佛像出現せしむべきか。

觀心本尊鈔は聖人が本尊を現はされるに先立つてその義解を示されたので、本尊の爲體は玆に示されて居るが如くに、釋迦多寶並坐して居る所に妙法蓮華經の五字が眞中にあつて、それから上行等の四菩薩が脇立となり、以下斯く〳〵の有樣であると迹化の菩薩或はその他の諸佛の有樣が示されて居るのでありますが、この釋迦多寶の眞中に妙法があるといふことはどういふ狀態であるかといふと、これは別に題目を書いた旗を立て、演說をして居つたものではない、音顯と申して言葉を以て說かれてある妙法を、形に現はせば妙法蓮華經となるのである。それを釋尊滅後なるが故に書顯と申して書いて顯すから、そこに「妙法蓮華經」が顯れて參るのである。これを本尊では眞中に大きく書いてあるが爲に、一番大事ぢやないかといふ思想が起つたのでありますが、これは優陀那院師も「眼前の迷惑」と申して、唯だ眼で見た素人の迷ひであると言つて居る。日蓮聖人在世の時分には、一尊四士の本尊も多かつた譯で、四菩薩造立鈔を拜して見ても分りますが、その他聖人當時、若くは程近い頃に立てられた池上本門寺でも、中山法華經寺でも、その他有數な寺を調査して見たならば、大體一尊四士の本尊であります。其處には題目が中央に書いては無い、題目は唱へ言葉となつて居つたことも立證し得られる譯でありま

す。又日蓮聖人が佐渡在島中に於ても、立像の釋尊に對して題目を唱へて居られたこと、又最後まで釋尊を大切になさつて居つたことも明かである。又釋迦佛供養鈔と稱するが遺文の目錄を御覽になつても澤山あるので、目眼女釋迦佛供養鈔、金吾釋迦佛供養鈔、その他多々あるのであります。これは未だ四菩薩も何も造らんけれども、釋尊一體を造立しても尊信して居ることがあつたのである。後には餘り形式論が喧ましくなつて、四菩薩の無い釋尊はいかぬといふけれども、四菩薩を加へる意味に於ての本佛の釋尊として皆奉戴したのである。今日の本尊論などでも形式論の方が喧ましくなつてしまつて、意義の方を輕く視て居るから、形さへ拵へて置いたら信仰意識は何でも構はぬ、好い工合に揃へて置きさへすればそれで宜いのだといふやうに、護符みたやうに考へて本尊をやつて居りますけれども、それは法華經の思想ではありませぬ。大體法華經は書かずとも造らずとも、唱へる上に本尊の來臨影響といふことを稟ふので、唱へただけで宜いのである、「勸請し奉る」といふことは何かと言へば、字で書くことでも木像を造ることでもない、活ける實在の佛にどうぞ此處にお出まし下さつて御照覽を願ひたいといふことが、來臨影響といふことである、「今來てお照し下さい」といふので、「そこに祀つてありますから眼を醒まして下さい」といふのではない。實在の本佛を信ずる意識は、壽量品に於ても洵に明かなことである。であるからそれは實際には形式も無ければ、吾々の感情は動きませぬから、叮嚀に御本尊を書いたり造つたりするけれども、その形式の方ばかりに力を入れて實在の本佛を忘れたならば、基督

教が攻撃する所の偶像として、劣等なる宗教と言はれても仕方が無からうと思ふのであります。唯だ基督教は、實在のものを寫象して來ることを絶對に罪惡の如くいふ所に缺點があるのである、又一方は寫してしまへばその本體を忘れるといふやうな缺點を有つて居るので、兩方とも私は非があると思ふのである、寫象しても常に寫象は本體を想ひ起す爲だといふことを忘れぬやうにして置かなければならぬと思ひます。

この後の所に「小乘の釋尊は迦葉阿難を脇士と爲し、權大乘並に涅槃法華經の迹門等の釋尊は、文殊普賢等を以て脇士と爲す、(これ等の佛はあつたけれども)未だ壽量品の佛をしまさず」と言はれた、さうして今日蓮の時に壽量品の佛が現れ給ふ、それは本化上行菩薩を脇士にして居る佛であると申して居られるのであります。但し唯だ脇士にして居るといふことだけが壽量品の佛ではないので、その脇士に依つてその釋尊が久遠實成の如來であつて、その活動が斯く〳〵のものであるといふ絶對の佛身を現はし、本佛を顯本するので、その顯本を形に依つて示す爲に、上行が側に居るのである。唯だ側に居るから有難いといふことてばない、側に居る佛は本佛なるぞ、本佛は斯く〳〵のものであるといふ意味合ひがあつて、始めて有難いのであります。要するに本佛の顯本を、上行を側に坐らせて事實に象徴して居るのであるのであります。

一〇、開目鈔　諸宗は本尊にまどえり、俱舍、成實、律宗は三十四心斷結成道の釋尊を本尊とせり、天尊の太子迷惑して我身は民の子とをもうがごとし、華嚴宗、眞言宗、三論宗、法相宗等の四宗は大乘の宗なり、法相三論は勝應身に似たる佛を本尊とす、天王の太子我が父は侍とをもうがごとし、華嚴宗眞言宗は釋尊を下げて盧舍那大日を本尊と定む、天子たる父を下げて種性もなき者法王のごとくなるにつけり、淨土宗は釋迦の分身の阿彌陀佛を有緣の佛とをもいて教主をすてたり、禪宗は下賤の者一分の德ありて父母をさぐるがごとし、佛をさげ經を下す、此れ皆本尊に迷へり、例せば三皇巳前には父をしらず人皆禽獸に同ぜしがごとし、壽量品を知らざる諸宗の學者は畜生に同じ、不知恩の者なり。

この開目鈔も唯今申す釋尊に對する意識を吟味して、本佛としての意識を持たんければ日蓮が教ゆる本尊にならないといふことを示して、諸宗は總て本尊に迷うて居る、俱舍、成實、律の三宗は小乘の宗旨であつて、釋尊を本尊とはして居るけれども、その釋尊は今度始めて覺つたもので、三十四心に結を斷じて道を成ずといふのは、結は煩惱のことて、菩薩の行が成就して愈〻佛に成られる時分に、丁度夜が明けて行くやうにパッ〳〵と次第々々に三十四段に煩惱を斷じて覺を開いたといふので、これは今度始めて佛に成つたことをいふのである。その中に於

てもその覺り方が未だ淺い意味を三十四心といふ、モウ一段高い所に行くと一念相應慧と言つて、三十四段でなく一念の其處に一切萬事が成就して、パッと覺を開いたといふ、その一念相應の慧に對して三十四心といふ言葉が卑しめられて居る。華嚴經などになれば一心法界をつゝむと言ひ、法華經に於ても一念三千といふ、一念に依つて速疾頓成する、提婆品の龍女の成佛に於ても、「尙ほこれよりも速かならん」といふやうな言葉は、この三十四段の覺といふやうな思想を蹴つて居るのであります。それ故にこれ等の小乘の宗旨は、今度佛に成つた、而もその成り方も餘程低い意味に於て成られた釋尊を本尊として居る、その事は恰も太子の位に居る者が、自分のお父さんは平凡な百姓だと思うて居るやうなものである、太子が自分の身を民の子だと思へば、親もやはり民だと思ふやうな譯で、自分の身を下すと同時に釋尊を非常に下して居るものである。それから華嚴、眞言、三論、法相の四宗は、大乘の宗旨であること故に、前の三宗より餘程進んで居る、その中に法相、三論の二宗は勝應身と言つて小乘よりも餘程勝れた應身の如來にしても非常な立派な、用も相も非常な光があるやうに說いては居るけれども、未だ低い意味になつて居るのである。それは例を擧げれば天王の太子が吾が父を侍と思ふ位の程度である、前のは親を百姓と思うた位であるが、今度は漸く侍と思ふ位である。華嚴、眞言の兩宗は非常に拗けて來、たのて、お父さんの位を少し低く見る位でなくして、之を侮蔑する態度に出てゝ實際我が父であるべき本佛の釋尊を押し下げて、盧舍那大日を本尊と定めた。盧舍那佛といふのも華嚴經に依れば成道一念の釋尊の偉大を說明したのであるけれども、華嚴宗は應身の釋迦と盧舍那とを分離し始めて、應身の釋迦と言へば盧舍那と別佛であるかの如き思想を作り出して來た。その思想は左程に明かには迷うては居らぬけれども、段々迷はす傾向を取つた所へ、華嚴宗に弘法といふ者が出て遂に眞言を新設して、マゴ〳〵して居つた盧舍那佛を今度は大日如來として、全然釋迦とは別の佛である、大日は釋迦に較べれば非常にえらい者だといふことを言ひ出した。その後に覺鑁といふ者が出て、釋迦は大日の履取にも及はずといふやうな烈しい事を言つた。それ故にこの思想の傾向から見れば、「天子たる父を下げて種性もなき者法王の如く爲る」て、天一坊式に出て來た、何物とも譯の分らん、大日といふのは元と釋迦の德を讃めたのであるけれども、それを分離してしまつたから大日といふものは何者だか分らぬ、それを天一坊式に引張つて來て釋尊を侮蔑したことになつて居る、それが眞言宗である。それから淨土宗は釋尊の分身である阿彌陀をば此土有緣だと言つて、その本體をなして居る釋尊を捨てゝしまつた、體を捨てゝ影に附いたものである、天月を捨てゝ水月に趨つたのである。それから禪宗は卑しい身分の成金などが少し金が出來たとか、瑞寶章の一つも貰つたといふのて親を馬鹿にするといふやうなやり方て、少しばかりの公案を弄つて釋尊を輕蔑し、或は釋尊の數を輕蔑するやうな事をいうて居る。斯樣なやり方は釋尊の絕對無限を意識せざるが故に起ることてある。今日の我が國體に關してもこれと相似たやうなことが多いのてありまして、日蓮聖人が本佛の絕對を光顯すると同時に、皇室の尊嚴を發揮した、それは兩々相並

んて實に世間と佛法との上に於ける日蓮の大功勳である、何と言つても日蓮聖人ほどこの點に就ての殊勳者は無いと言つて宜いのである。

これ等は何れも皆本尊に迷うて居る、恰も支那に於て三皇以前には父を知らず、夫婦の制いまだ立たざるが故に、姙める者があつても犬猫同然で、誰がお父さんであるか分らない、母は姙娠するが故に分るけれども、その胤は誰の胤であるか分らないやうなものである。佛教徒が佛教に依つて信仰すると言ひながら、「我も亦これ世の父」と言はれ、「汝等はみな吾が子なり」と言はれた釋尊を捨てゝ、さうして誰今申すやうな樣な意味に於て本佛を意識しないから、これは皆禽獸に等しい者である、壽量品を知らざる諸宗の學者は畜生に同じ、不知恩の者なりといふ最も峻嚴なる判決を下された。これは決して酷い事ではない、當然の事である、父を知らぬから禽獸だと言はれたので、酷い事はない。佛教を信じない者はいざ知らず、信ずると言ひながら釋尊を侮蔑するなどといふことは、丁度子にして父を敬はず、國民にして皇室を敬はざるが如きもので、國家に於ては逆賊である、家庭に於ては不孝の徒であつて、道德上の最大の罪惡であるから、佛教に於て本佛を侮蔑する觀念を指して不知恩の者畜生に同じといふ事は、何も差支ない。丁度高山彦九郎が足利尊氏を逆賊尊氏と罵つたと同じ話で、これは道德的判斷の場合、峻嚴なる所が尊といのである。日蓮が徒らに他宗を罵詈したものぢやといふ風に考へて、「さう酷く言はないても宜いぢやないか」といふやうな事を言ふけれども、それは恰も「足利尊氏だつてそんなに逆賊々々といふには及ぶまい、あれだつて採る所があるぢやないか」といふのと同じで、取るに足らぬ俗論である。

一一、三大秘法鈔　壽量品に建立する所の本尊は、五百塵點の當初以來此土有緣深厚、本有無作三身の教主釋尊是れなり、壽量品に云く如來秘密神通之力等と云云、疏の九に云く一身即三身なるを名けて秘と爲し、三身即一身なるを名けて密と爲す、又昔より說かざる所を名けて秘と爲し、唯だ佛のみ自から知るを名けて密と爲す、佛三世に於て等しく三身あり、諸教の中に於て之を秘して傳へず等云云。題目とは二つの意あり、所謂正像と末法となり、正法には天親菩薩龍樹菩薩題目を唱へさせ給ひしかども、自行ばかりにして止みぬ、像法には南岳天台亦題目計り南無妙法蓮華經と唱へ給ひて、自行ばかりにして廣く他の爲に說かず、是理行の題目なり、末法に入りて今日蓮が唱ふる所の題目は前代に異なり、自行化佗に亘りての南無妙法蓮華經なり、名體宗用教の五重玄の五字なり。戒壇とは王法佛法に冥し佛法王法に合して、王臣一同に本門三大秘密の正法を持ちて、有德王覺德比丘の其の往昔

を末法濁惡の未來に移さん時、敕宣並に御教書を申下して、靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて、戒壇を建立すべき者か、時を待つべきのみ、事の戒法と申すは是れなり、三國並に一閻浮提の人懺悔滅罪の戒法のみならず、大梵天王帝釋等も來下して蹋み給ふべき戒壇なり。

三大秘法鈔は、前に申した本尊、戒壇、題目の三つを示されたので、この場合の本尊は釋尊を明かに示して、壽量品に建立する本尊は、五百塵點の當初以來この娑婆世界に緣厚くして、さうして本有無作三身と言つて、途中から出來たものではない、又法報應三方面を備へて居る釋尊である、別に釋尊は應身で、阿彌陀が報身、大日は法身といふ樣な、そんな分裂的なものではない、釋迦は絕對の三身即一の如來である、それが本尊である。その事を壽量品に於て如來秘密神通之力と說れた、この經文の意は何者も釋尊の頭に乘る者はない、釋尊が最高絕對の人格者であるといふ事を示して居るのである、故に天臺の文句の釋を引いて、三身即一のそこに秘密の意味がある、今迄に說かなかつたといふ所に秘密の意味があるといふのは、佛の三身即一の本體に約して秘密を說明し、壽量品以前に說かなかつた說法の關係に於て秘密の言葉を說明して居るのであります。

次に題目に二つの意があるといふのは、唯だ自分が心の中に唱へてさうして修行に移さなかつた天台のやり方と、それから日蓮は自行化他に亘つて南無妙法蓮華經を唱へるといふ非常な簡單な解釋がされて居りますが、それは深い意味に於ても違ふのであるけれども、この所では題目に關しての台當の異目を明かにするので、輕くお考へになつて示されたものと思ふ。但し此處には皆「唱へる」「唱へる」と書いてあるので、題目は唱へるといふ事が正意であることは能く分るのである、「題目を唱へさせ給ひしかども」と言ひ、「唱へ給ひて」と言ひ、「今日蓮が唱ふる所の題目は」といふ樣に、理窟ではない。又「名體宗用教の五重玄の五字なり」と言つて字を書いてある、私が始終いふのが是である、唱へ言葉としては一音で、文字にすれば五字である、一音五字、そこに理窟は無い。即ち聯隊旗の如きもので、それに　陛下が深い意味を罩めて賜はつたものであるから、そこに意義が生じて居るのである。これは宗教の形式で、アーメンと言つたり、南無阿彌陀佛と言つたり、ノーマクサマンダーと言つたり、トウカミエミタメと言つたり、皆自分の信仰を表白する所の形式である。形式といふ言葉を非常に輕いと思うて腹を立てる者があるけれども、さうではない、日蓮聖人は之を袋に譬へて居る、妙法五字の袋といふ、それは形式であるから袋といふ言葉を使ふのである、或は藥に譬へて居るのでも形式である、それを通してその利益を與へる所の、利益の仲介者である、佛から言へば佛の慈悲なり功德を傳達するものである、吾々から言へば信仰を表白するものである。丁度電氣が傳つて行く銅線みた樣なもので、佛の大慈悲と吾々の信念との其處に感應する所がなかつたならば、途中の電線が切れて電氣が通はぬ樣なものである、併しその銅線だけを古道具屋に賣つても二束三文のもので、大した値打は無い。所が妙法蓮華經の銅線々々と言つて、此方に信念が無くとも

佛の方に慈悲が無くとも、唯だ其處にある銅線が有難いやうに思うて、銅線の潰し値てやつて行かうとするやうな思想が強い、これ皆俗論である。左樣な事は內部では通用しても、宗教學の研鑽の場合に行つて、左樣な意味で出品したならば、「これはモウ古金屋に賣つてしまへ、紙屑買に賣つてしまへ」といふやうに捌かれる事は明白である。現に左樣な意味を以て日蓮主義を批判して居る學者もあるのである、それは日蓮主義は庶物崇拜であるといふ、尤も庶物の中でも文字は隨分高等なものであるから、法螺の貝を有難がつたり、袈裟の布片を有難がつたり、刀の鍔を有難がるのよりは餘程上等の方であるけれども、宗教學ではやはり庶物崇拜の一種に過ぎぬと言つて居る。私もそれには同感である、さう云ふ意味で行くならば、宗教意識の上に於て決して高い思想とは言はれないと考へるのである。所が左樣な批難のある事も知らぬものであるから、敵の本營に明かならず、自分の主張に明かならずして、敵を知らず己れを知らざるが故に、百戰百敗である。左樣なヘマなやり方をして行つたならば、一時の勢ひで日蓮主義が發展するやうでも、何時かは宗教の科學的研究、最高批判に觸れて、その時には蹴散らかされてしまふ、さういふ下手なやり方をしてはいくまいと私は考へる。そこでそれは唱へ言葉で宜いのである、闘はねばならぬのは本佛の教義、それに對する意識信念、これが世界の宗教學上に於て卓越した意義を有つやうに日蓮主義は發揮して行かなければならぬ。それを明かにしないで、日蓮の書いた本尊の形式とか、唱へ言葉とか、そんな事を言つてワイ〳〵して居れば、宗教學の高等批判の上に於ては笑はれるぢやないか。現に姉崎博士なども日蓮崇拜者の一人であるけれども、日蓮聖人の本尊の書き方は餘り雜然として居るとか、これで世界に弘まるといふことはどうも一寸危ないとか言はれて居る事を蔭ながら聞いたが、それを聽いて非常に腹を立つて居る人もあるけれども、自分は少しも腹を立てる事は無いと思ふ。それはさういふ意味に於てこの本尊の字を以て、その儘擴げて行かうといふならば、姉崎博士が言ふのは尤だと思ふ、日蓮聖人の弘め樣うとせられたのは必ずしもさういふ形式の末ではない、吾々が論證するが如く、壽量品の教義に依つて行くのであるから、日蓮聖人に於ても樣々に顯はされた、即ち一尊四士で顯はした事もあり、前にいふ通り文字や形に顯はさないでも、言葉で勸請する事もあるのであるから、さういふ所に引かゝる必要は無いと思ふ。

それから戒壇は即ちその信仰を定めて誓ひを立てる場所でありまして、今身より佛身に至る迄斯の如き信仰を維持して行くといふ事を本佛に對して誓ふのである。それからそれと同時に本門の戒壇に就ては、日蓮聖人の立正安國の趣旨が自から現れて居ると思ふ、それ故に此所にも「王法佛法に冥し佛法王法に合して」といふ事が云つてある、この偉大なる法華經の宗教的信念と、我が日本の萬邦に卓越せる所の國民道德、中外に施して悖らざる所の大和民族の精神文化と、世界の最大なる宗教哲學、倫理の根本を教へたる佛教、即ち世界的なるものと國家的なるものとが握手して、さうして非常な偉大な文明がそこに現れて、日は東より出でて西を照すといふやうな意味で行くことを王佛冥合と申して居るのである。であるからこの戒壇で受ける誓ひは、佛教の信仰として本佛に對する意識、國民道德として皇室の尊嚴および國體、日本の天職、日本の精神文化を維持して行くといふやうな、日本の國民として心得べ

き、當然なる思想、國民精神の間違ひない所のものがこの戒壇場に於て敎へられるものであると思ふのであります。それ故にそこには世界の各國よりして、この偉大なる文化に浴する爲に敬意を表する者もあり、往いては天の神も來つて敬意を表するといふのて、天地神明もこれに贊成を表し、中外列國の人達もこれに敬意を表するといふだけの理想的なるものを打立てやうといふことて、先づ法華經の思想と我が建國の理想とを相合して、最高の精神文化を其處に打立てるのであります。それは「勅宣並に御敎書を申下して」といふのであるから、日蓮は決して單に之を宗敎の方からやらうとは思うて居らぬ、桓武天皇が比叡山を建てられたるが如く、聖德大子が四天王寺を建てられたるが如き意味に於て、皇室の御事業として斯の如き偉大なるものゝ立つ事を願つて居るのであります。その意味に於ては日本の今日の文化は、日蓮の敎から見ると少し貧弱になつて居る、折角融合大成して來た過去の文化を分裂せしめて貧弱にしたのは失態であつて、無論神儒佛三敎の粹を併せて統一し、健全なる方面を發揮し、更に世界的文化に向つてその長を取り短を捨てゝ、偉大なる統一、大成の文化を日本に造らなければならぬのて、それには固陋なる思想もいけなければ輕光なる觀念もいけない、大體三敎の融合は誰かやるかと言つたならば、神秘的には稜威の然らしむる所、國民の包容性といふけれども、實際思想と思想の關係になつては、論語を以て佛敎を融合する力は無い、古事記にも無い、それは佛敎である。佛敎の中にも般若經や阿彌陀經では、論語と阿彌陀經と言へば衝突する古事記と般若經と言つても衝突する、迚もうまく行くものてはない、三敎を融合して統一的文明たらしむるものは佛敎の中の法華經である。それが分らぬて日本の文化を統一大成するといふ事は出來ない、唯だ漫りに思想の融合を說いた所が、融合といふのはそれを包容し統一するだけの偉大なる思想を中心に置かなければならぬ。軍曹をして旅團の兵を指揮せしめた所が、その戰爭は負けるに極つて居る、旅團は旅團長を戴かなければならぬ、師團は師團長を戴かなければならぬ、それだけの名將を戴かなければ戰爭は勝てるものてはない。今日の思想の戰ひに於ては、軍曹の位地に在る者を以て師團長とするが如き態度が多い。今頃二宮尊德を擔ぎ出すといふやうな事は、軍曹か伍長をして日本の三千年進步したる文化を指揮せしめやうとするものてある、愚も亦實に甚しい。誰が過去の歷史に於て我が傳統的思想の融合統一を成したかといふ事を歷史に遡つて考へたならば、近時まて崇拜せられたる本居宣長、平田篤胤の如き者は、我が文化を貧弱ならしめたことは明白な話てある、德川時代の儒者と雖も佛敎に對する觀念は非常に惡い、國體に對しても碌な考へは持つて居ない者が多い、どうしてもこれは聖德太子、傳敎大師、日蓮聖人、光圓卿のやうな不世出の偉人を俟たなければならぬ。さうしてそれが實は朝廷の方針てもあり、國民全體の方針てもあつた本居、平田或は林羅山といふ樣な學者は一家言を爲した者てある、今迄の文化に對して一種の奇矯の說を立てたに過きぬ。月本の文化は上聖德太子より歷世今日に至つて、三敎を融合統一するにあつた、それ故に日蓮の論ずるが如く、佛敎は大事てあるけれども、阿彌陀經や般若心經などを本にしたのてはない日本の文化を大成する事は出來ない、王法佛法に冥するといふこの大事な時に於て甚だ遺憾な事てあるといふのて、立正安國論を書いて之を諫めたものてある。

教義

日蓮聖人教義綱要

「第四十五回」

井村日咸

第十一章　本門の戒壇

第一節　教觀の一致

本門の本尊は吾人信仰の理想を示したものであり本門の題目は吾人信仰の實際を示したものであつて此本尊と題目とは常に離るべからざる關係にあるものである、教門と觀門とは絶待に一致すべきものであ若も此が離れて居り矛盾する樣なことがあれば、我々の信仰は成就することは出來ない、本門の教に於ては少乘教抑の樣に、小さい戒律即ち酒を飲むなとか殺生をするなとか云ふ樣な事相の戒律は八ヶ間敷言はないけれども、我々の信仰を維持するに就て、其信仰が紊れざる樣に、信仰が常に本尊と離れざる樣に警戒して行く、今身より佛身に至るまで我等が信仰は本尊に合致して少も紊さぬ樣誓願を立てゝ行くのが本門の戒法である、此を第一義戒と云ふのである、第一義戒は事相の戒でなく理戒と云ふて、形の上に小まかいこせ〳〵した事を制止するのでなくて、共根本を戒しめて誤らざる樣に制御して行く戒法である、今本尊と我等の實行が離るべからざる關係にあることを詳細に御噺致さうと思ふ、其關係を圖示すると、

本門の本尊・本佛……本法……本化

本門の戒壇……始本不二……教行一致……能所一倶

本門の題目……得益……修行……發心

と以ふ樣な形である、我者衆生の發心は本化の菩薩の化導に待たねばならぬ、本化上行菩薩末法に降誕して日蓮聖人と示現し、法華經本門の教旨に依りて二、大秘法の教義を宣傳せられた、我等は日蓮聖人の宣傳に依りて玆に自覺し目醒めて菩提の道に志すことを得たのである、我等若不幸にして聖人の慈教に接せざれは永劫に佛陀の教法に近付くの機會なくして終つたであらう、我等が佛陀の教法に近付き得たことは全く日蓮聖人の教義宣傳の賜と言はねばならぬ、そこで我々は常に聖人の御聖訓に依つて指導を受けて行かねばならぬ、我等の行住坐臥は凡て御聖訓を奉體して進退せねばならぬ、斯樣に我等の發心と本化の指導とは常に一致して離るべからざる關係にあるが故に能所一倶と言ふのである、能化所化一倶して進退するの意である、御聖訓に

日蓮さきがけしたり、わたうども二陣三陣につゞきて、加葉阿難にも勝れ、天台傳教にもこへよかし。（縮遺一三八九）

と云ひ、最後の御嚴訓には

日蓮が弟子檀那等の中に日蓮より後に來り給ひ候はゞ、梵天帝釋四大天王閻魔法皇の御前にても、日本第一の法華經の行者、日蓮房が弟子檀那なりと名乘つて通り給ふべし。（縮遺二一一四）

と仰せられた、日蓮聖人と我等とは、所謂死なば諸共と云ふ關係であることを御論に成つたので、此が能所一倶の狀態である、此に就て一寸注意して置かねばならぬことは、我々は日蓮聖人の御化導に依らねば發心する機會を得ないと云ふ事から、日蓮聖人丈あれば外のものは入らないと云ふ考を起したものが出來たことである、これは大變な間違であります、日蓮聖人は我〻に教主釋尊の大慈悲あることを

宣傳して覺醒を促がされたから、我々は其意を領解して、本佛に對する信仰を起したのである、日蓮聖人御自身が教主である自分が救濟するのである抔とは決して仰せられては居ない、それを間違て日蓮聖人を尊信してお釋迦様を捨てる様な考へを起したは大變な間違てあります、今日はそんな事を盛に言論て言ふて居る人もあり、又言はないても實際にそう云ふ形を示して居るものが澤山にあるとは大に寒心すべき事であらうと思ふ、今日日蓮宗の相當有名な寺院に行て見れば、祖師堂と稱するものは何れも立派なものだが、御本尊を安置した本堂は誠に貧弱だ、總本山の身延山杯は祖師堂は立派だが本堂が無い、斯う云ふ所へ參詣して見ると、盛んに日蓮聖人の功能を吹聽して居るが、其日蓮聖人の御主張たる本門の本尊に就て何等の紹介もしない様な有様だ、總本山既に然り、況や其末寺をやてある、私等本門の本尊を信じ、正しき日蓮主義を奉ずる者から見れば、實に何とも申し様のない亂れ方である、こんな所に信仰したならば、成佛どころか他獄の中へ眞逆に隨込ねばならぬ、日蓮聖人は念佛門徒等が釋尊誕入の日を東西二佛の死生の日と爲した事に就て『豈不孝の者に非ずや、逆路七逆の者にあらずや』（縮遺一五八四）と仰せられた、日蓮聖人あるを知つて教主釋尊を捨て奉るもの豈逆路七逆の輩にあらずやである、此點は門下一統の大に改悔懺悔すべき大問題であります。

次には教行一致てありますが、既に我々が日蓮聖人の御教訓に依つて信仰に入り得たならば、其御教訓に依つて實行に移らねばならぬ、其御教訓は佛陀の御說に成つた教法を御傳へ下されて居るのであるから、我等は佛陀の教法を實行の標準に置かねばならぬ、我等が性僻を矯直す處の規矩準繩は先覺者たる佛陀の教法を標準としてそれに添ふ様に實行して行く處に、我等衆生の修業は進んて行くのである、

汽車はレールの上を走つて目的地に達する、脫線すれば進行は停まる、教法のレールに乘つて進むが故に目的地に達することが出來る、教法を外れては進行することが出來ない、故に我々の修行は常に教法のレールを外れぬ様に注意して行かねばならぬ、教法と我等の修行とが一致して行く處を教行一致と云ふのである、今身より佛身に至るまて能く持ち奉る南無妙法蓮華經と誓願するのは此教行一致を誓ふたのである、今身とは出發點で、佛身とは終點である、此起點と終點とを連絡して居るのはレールの教法である、此教法のレールの上に乘て進行さへすれば、遂に終點の佛身を成就するが故に能く持ち奉ると誓ふのである。

次は始本不二である、我等の實行が佛の教法に一致して誤らなかつたならば、遂に其目的を達成して佛果を成就するに至ることは當然である、其成就せられたる佛果は圓滿なる覺體であらねばならぬ、其中途に於ては分々の覺證が顯れる事であるが、最後の覺體は究竟圓滿なる覺體が顯れるのである、其覺體は本佛即ち我等に教法を御與へ下された處の佛の證悟と寸分違はないものでなければならぬ、元來本佛の御思召が自分と等しく異なること無からしめんと云ふのにあるのであるから、今與へらるゝ證悟は本佛のそれと違目のあるべき筈でない、但時間の上に古いと新しいとの違目はあるが、證悟そのものには違目は無い、そこて我等の教主釋尊の御覺體を本覺とし、我等の新しく出來上つた覺體を始覺とし、此始覺佛と本覺佛との證悟は同一なるが故に始覺本覺一體不二と云ふのである。

本化上行菩薩の御指導に依り我々衆生の發心するを下種益と云ひ、教行一致の實行に勵みつゝある處は此を熟益と云ひ、遂に始本不二の覺體を證得し得るに至るを脫益と云ひ、此三益は我等が信仰の始中終に就て名付られたもので、修行の分位の名である、

其實質に於て何等の變化あるべきものでない、然るに實質に於て變化あるが如くに考へて古來種脱問題を論爭して居るが、此は本尊圖顯の年時を爭ふと同樣な愚論で、共に其實體實質を會得せざるより起つたものであるから其實質を理解すれば當然消滅すべきものである。

以上教觀一致の狀態を申上げたが、此教觀一致の狀態を、今身より佛身に至るまで持續して必ず其目的を成就せんと誓願する、之を本門の戒法と稱するのである、又第一義戒とも云ふのである。

宗門史料

史料

青村一編

下總濱野本行寺末（七ヶ寺）

上總國市原郡八幡村　泰廣山　圓頓寺
同　下野村　光昌山　本泰寺
同　草苅村　法音山　行光寺
下總國印旛郡臼井村　長谷山　妙覺寺
同　千葉郡平山村　雲中山　妙本寺
同　村田村　神明山　泉福寺
同　金澤村　金樂山　金城寺

下總上泉寶泉寺末（二ヶ寺）

下總國千葉郡下泉村　成就山　延命寺
同　印旛郡内田村　法龍山　妙宣寺

下總生實本滿寺末（六ヶ寺）

上總國市原郡北村　飯納山　壽福寺
同　國吉村　法性山　妙照寺
同　久々津村　勝珠山　本性寺
同　神崎村　法光山　眞淨寺
同　高倉村　本乘山　高福寺

下總國千葉郡椎名村　安穩山　常福寺　同　奥田村　長榮山　正覺寺

上總内田本傳寺末（五ヶ寺）

上總國長柄郡刑部村　長遠山　妙傳寺　同　玉野村　玉野山　安照寺
同　市原郡牛久村　高福山　本昌寺　同　望陀郡打越村　打越山　立源寺
同　内田村　境智山　立本寺　同　大竹村　平野山　本泰寺

上總木更津成就寺末（八ヶ寺）

上總國望陀郡中島村　法牧山　本永寺
同　瓜倉村　本門山　感應寺
同　周集郡富津村　松榮山　長秀寺
同　駒久保村　寶光山　法藏寺
同　下飯野村　南榮山　法性寺
同　天羽郡相野谷村　西谷山　妙常寺
同　佐貫花香谷村　妙谷山　妙勝寺
同　同　壽福山　安樂寺

下總本佐倉經眞寺末（五ヶ寺）

下總國印旛郡榎木戸新田　妙立山　新藏寺
同　高岡村　長榮山　要行寺
同　蒲勤町　法光山　妙經寺

上總國市原郡椎津村　鷲峯山　行傳寺
同　島野村　法性山　善龍寺
同　野毛村　妙永山　法泉寺
同　姉崎村　明王山　安城寺
同　同　慶傳山　長遠寺
同　同　臺榮山　圓能寺
同　同　寶珠山　寶藏寺

上總船目本立寺末（五ヶ寺）

上總國周集郡永和田村　明光山　妙傳寺

同　大袋村　正榮山　大經寺　同　上野村　鍵法山　妙典寺
同　黑土村　長修山　法輪寺　同　山邊郡土氣本郷　東光山　西谷寺
上總北之幸谷妙德寺末（五ヶ寺）　同　小山村　小樹山　興善寺
上總國武射郡下之郷村　常住山　妙光寺　同　大木戸村　寶光山　善德寺
同　折戸村　迅證山　妙隆寺　同　越智村　長興山　常圓寺
同　廣根村　平野山　圓壽寺　同　大澤村　妙興山　大澤寺
同　木刀村　藥王山　妙榮寺　同　宮崎村　本宮山　法蓮寺
同　中里村　長國山　光泉寺　同　小食土村　壽福山　常泰寺
上總土氣善勝寺末（計廿二ヶ寺）　同　池田村　法光山　法秀寺
上總國埴生郡二宮庄下太田　大森山　萬光寺　同　大竹村　經王山　常泉寺
同　長柄郡押日村　月光山　來光寺　同　宮ノ下村　日朝山　法光寺
同　山邊郡大椎村　滿集山　長興寺　同　千葉郡和泉村　如意山　東光寺
同　市原郡金剛地村　應時山　本宮寺　同　多部田村　寶珠山　最福寺
同　板倉村　光珠山　法行寺　同　富田村　常光山　正福寺
同　長柄郡桂村　高桂山　安立寺　上總土氣本壽寺末（外廿一ヶ寺）
同　山邊郡駒込村　雷光山　東榮寺　上總國山邊郡大和田村　寶珠山　寶藏寺
同　長柄郡味庄村　寶秀山　光明寺　同　小野村　天神山　本圓寺
同　鮮木村　本妙山　法輪寺　同　一位山　本源寺
同　丹尾村　白尾山　西林寺　下總國印旛郡砂子村　寶珠山　本源寺
同　千眼山　東成寺　正誤
同　眞行村　法光山　高海寺
同　高津戸村　藥王山　本休寺
同　南玉村　正立山　金城寺
同　小中村　勝中山　覺行寺
同　平澤村　高照山　本榮寺
同　長柄郡大登村　萬榮山　萬福寺
同　庄吉村　寶珠山　福莊寺
同　芦網村　藏王山　實相寺
同　櫻谷村　櫻谷山　妙圓寺
同　力丸村　神力山　妙教寺
同　山根村　大和山　滿藏寺
同　飯尾村　御飯山　飯尾寺
同　別所村　安樂山　東光寺
同　大加場村　東野山　道脇寺

前號六一頁十三行編者曰くの次、以下の通り訂正見附玄妙寺は妙滿寺と共に古來體の三個寺同十四行本•寺は本•興寺
（以下次號）

臨時號豫告
大僧正本多日生猊下講演
先帝の盛德と國民の反省
統一臨時增刊先帝追憶號
大正十年五月廿五日發行
定價　一部金拾錢、郵稅金五厘、百部以上二割引。

思想問題

社會改善と宗教の價値轉換に就いて

兒玉常宣

本問題を述ぶるに當り章節を分ち詳論す可きなれ共紙數の制限ある爲め大要を述べん

現代の文明が其の根底に於て過誤のあると云ふ事は彼の世界大戰の事實に鑑みれば今更證明するまでもない、此處に於いて根本的に改善を要すると云ふ事は明白である、乍然現今一般社會に唱導せられつゝある社會主義者一部改造論者の思想中には殆んど共通的の弊害並びに缺點のある事を容易に看取し得る、一言にして云ふならば精神文明を輕視し單なる物質的條件にのみ趨りつゝあることが根本に於いての指誤であると云はざるを得ない、思ふに現時の社會が切實に要求しつゝあるものは、所謂新經濟組織若しくは新制度には非らずして眞精神である換言すれば此の眞精神を要する爲めに改めて新經濟組織や制度を必要とするのである、然るに社會主義者或は改造論者にありては此等自明の理をも無視し否寧ろ精神的文明を呪ひ、極端なる唯物史觀論を金科玉條として社會改造を說き制度や組織の改造を行ふならば直ちにパラダイスの出現を見るが如く夢想しつゝあるは本末顚倒の甚だしきものと云ふ可きである、若し精神問題を度外視して經濟組織の一方にのみ走るならば假令新經濟組織が設定せらるゝとも、そは再び經濟上に於ける强者が弱者を虐待すると云ふ結果に終るに過ぎない、抑も精神問題即ち思想問題を閑却して文化を建設せむとするは謬りて世界各國の歷史を檢攻し其の盛衰の跡を觀るに必らず國民思想の惡化善化の奈何に依りて興亡のありし事は史實の雄辯に證明する所である、然らば思想の善導は如何にして期すべきか、勿論一方教育の普及道德心の培養と云ふ事は必要なれ共國民思想教化の第一義は善良なる宗教に依らなければならない、されど宗教も亦政治教育經濟其の他社會的勢力と同じく、誤つた價値を尊いものとする弊がある、例へば佛教信仰の正統、佛陀出世の本懷衆生成佛の直道たる日蓮主義の弘法者及び信者にして固陋なる弊風に固執し或は低級なる信條に墮落し、一般迷信と撰ぶところなき俗信を鼓吹し眼前の自己安逸を貪りつゝある者の存すると云ふ如き何れも價値の見誤りをなして居る、故に近時簇生しつゝある社會問題を解決し眞文化を建設せんとするならば善良なる宗教の價値を見直すの必要がある、謂ふまでもなく宗教は人類の最高理想に對する熱望及び之れに達せんとする大道であり人間生活の本義を敎ゆるものである、又他面より見るならば現今社會の傾向は個人的信仰意識よりも寧ろ社會意識と云ふ事が大切言ひ換へれば社會的價値と云ふ觀念が必要であると云ふ事が自覺されて來た而して或論者は宗教は社會的義務觀なりと言ひジェームス氏の如きは曰く宗教は最高の社會的價値意識なりと、之れを過去に鑑みるも實に宗教は從來社會の秩序を維持する上に於いて重大なる意義を有つて居た例へば宗教上に於ける儀式禮拜等の如きは何れも自己本位には非ず社會本位として表れて居る、佛陀の訓誡より見るも個人的利益個人的幸福のみを本とするものに非ずして(上求菩提下化衆生)社會を徹して現はるゝ所に價値を存するのである。

是れを文化哲學上より見るも政治は文化の形式、

教育は文化の事實にして宗教は實に之等現象の源泉である、一言以て云ふならば宗教は文明の高等生活と密接なる關係を有し善良なる宗教の亡ぶることがあるならば文明の高等要素も亦消滅することになる繰返して言ふ現代社會生活に不安動搖を感ぜしめつゝある所以は諸種の原因ありと雖も其の根本的原因は文化の本源たる宗教に對する價値意識の顚倒より來る、迷信俗信の横行に起因するのではあるまいか、國聖日蓮が「佛法ハ體也世法ハ影也、體曲レバ影自ラ斜也」と斷じ又天晴地明の理を說きし本意も此處に存すると思ふ、故に宗教的要求に對して甚だしく冷淡なる世人や盲信迷信の弊に墮せる多數の現代人に宗教の眞價値を理解せしめ、極端なる偏靈の思想より來る精神生活に陷ることなく、流れて物質偏重の謬說に迷ふことなく、社會生活の第一義を領得し、國家と宗教、社會と佛教、精神生活と物的生活此の兩者の關係を尤も克く調節し精神の光明を高上せしむると共に、資生產業の道を拓開し健全なる文化價値創造の本源たる一乘教即ち日蓮主義の正觀に依り、社會問題の中心たる勞働問題、婦人問題、政治問題、人種問題等の解決に資せざるべからず否此の宗教に依つてのみ救はれることが出來るのである。

記事

統一團新舞鶴支部發會式

自分の周圍や所屬の社會は己れにとつて大切なる勢力であるか、其社會と協同し又之れを感化して萬人共に本佛の光明の元に進むのが吾黨の本領ではあるが頑迷にして邪言を用ひず同化せざる場合には積極的態度に出づるのも敢えて不可でないと思ふ、同信の眷相謀り大正八年當所に教會を建設して爾來二年有半を經過せしも行學の進歩と共に信仰上の變化を來たし正法正義の弘通は顯本法華宗なる事を知り得たる吾人は斷然檀信徒打揃ふて改宗する事に決し四月十五日本部より特派せられたる社會部長同友日就管正一行を迎へ同師司會の下に莊嚴なる改宗式を勤修し引續いて、宗祖降誕七百年報恩會並に統一團新舞鶴支部發會式を擧ぐ左に概況を報道せん。

當日はどんよりとした花曇りとも云ふ可き日和にて物靜なる地方に更らに一層の長閑さを示して居た、此の日午前十時頃より各地方よりの檀信徒相つどい忽ち會堂に溢れ餘て屋外に設けありし座席にまで充滿し殆んど立錐の餘地なき盛況であつた、法要勤修直ちに開會を宣し桑村常信師結團式擧行に至るまでの經過を述べ兒玉常宣師感恩書朗讀熊井本光師神戸支部を代表して祝詞朗讀各地よりの祝電朗讀終つて講演會に移る「社會改善と日蓮主義」兒玉常宣師「正義決定の信」熊井本光師、「感激と信仰」の題下に國友管正二時間餘に亘る長廣舌を振はる、時ならぬ轉法輪に浴し滿堂寂として聲なく來日法悅溢るゝ許り、終つて來賓として來會せられたる舞鶴鎭重府司令長官佐藤藏太郎中將閣下立つて、今回改宗統一團結團の主動者として若年の桑村常信師が克く多數信徒を隨へ自覺せる團體として、爲法國に盡す、日蓮主義の眞髓に達し老父僕侵師を導かるゝ事は大孝の基ひ未だ年若きに克く此の知き大功を讃てられたる事は末法稀有の出來事にして定めて宗祖も御納受あらせらるゝ事ならん、否自分が宗祖に替りて勇猛精進の行ひを讃歎す、更らに晝夜常精進の努力を望むと恰も慈父の雅度を以て感激溢るゝ知き祝詞を述べられ閣下發聲の下に　天皇陛下の萬歲を三唱し午後五時過ぎ盛會裡に會を閉ぢた來會者三百有餘名。（舞鶴支部報）

第六部監督布教戰報

□三月五日於川上小學校「開會」佐々木村長「君が代」上級生徒合唱「勅語奉讀」飯田校長「佛教と實際問題」中原通應師「教化生活」笹川管正□七日於岩國町長久寺「佛教信仰の妙味」中原通應師「超勝の教義と立正觀」笹川監督布教師□八日於萩妙蓮寺「日蓮上人の性行」笹川管正□同日夜於壽座「開會」紀野俊曜師「近代文明と日蓮主義」中村通應師「國民思想の統一と文化の發揚」笹川管正□九日於三隅了性院「日蓮主義の信仰」中原通應師「日蓮上人の抱負」笹川監督布教師□同日夜於同院「正義の信仰と其活現」中原通應師「日蓮主義の同向」笹川管正□十二日於久留米市日吉校「開會」中原龍己氏「國民思想の統一」笹川管正「法華經に現はれたる宇宙人生觀」同師□十三日於鎭山町高等校「開會」中原法學士「社會教育と教化事業」笹川管正「法華經に現はれたる宇宙人生觀（續）」笹川管正□十四日於柳川妙經寺「開會」吉見法榮師「日蓮主義の信行」笹川管正□同日夜於同寺「開會」檀菊雄氏「文明の啓發」笹川管正□五日於二川小學校「日本國民の覺悟」出海俊義師「現代思想の檢討」笹川管正□同日夜於渡瀨新興寺「開會」出海山主「靈性の發揮」針貝與三郎氏「日蓮主義と現代」笹川管正□十六日於大牟田市旭館「開會」大牟田天晴會幹事「祝詞」立正愛國會及天晴會「國聖としての日蓮上人」間部昌學師「思想善化と日蓮主義」中原通應師「現代を醫すべき日蓮主義」笹川管正□同日夜於同館「開會宣言」愛國會幹事「感謝の生活」出海師「國聖としての日蓮上人」間部師「佛教と實際問

題」中原師「日蓮主義の大要」笹川當正、同夜講演後特に信徒の希望に依り於大牟田說教所「信仰に就て」古賀氏「法悅の妙致」出海師「三寶具足の意義」笹川當正□十七日笹川師は本泰寺中原山主三男亡曙氏の葬儀に大導師として授戒引導せられ、十八日午前四時再び山陽線沿道の布教に向はれたり。因に各地共聖誕七百年紀念傳道の意氣盛にして三百名乃至千名の聽衆を下らず多大の法益を得たりと云ふ□三月十八日福川驛於溫田教會聽衆四十名「開會の辭」山岡俊泰師「日蓮上人の安心」笹川監督布教師□三月十八日富田町大正座に於て開會到地附近は一般眞宗信徒にして本宗は德山町に本妙宗の一寺院ある而已山岡師は綱領を事とせず青木星井等の三四名の信徒と努力し準備に約壹週間を要し而かも當參聽者の如何を憂慮せしに當日千名內外の聽衆あり而して其の講演に多大の反響ありしとて信徒の悅びと意氣は虹の如し「現當の樂」河村富田小學校長「防長の志士今何處に」山岡俊泰師「德敎建設と健全思想」笹川監督布教師□三月十九日切山於秋林寺開會聽衆八十名「開會の辭」松永信恕君「鎌倉時代と現代」山岡俊泰師「日蓮上人と法華經」笹川監督布教師□三月十九日夜同所に於て開會す聽衆百三十名「開法の威力」山岡俊泰師「法華開顯統一の功能」笹川監督布教師□三月二十日廣島市妙誅寺に於て開會す當日降雨聽衆二十名內外「開會の辭」小幡覺正師「法華體得の意義」笹川監督布教師□三月廿日夜可部町於說教所聽衆四十名「開會の辭」島田日開師「靈性の開發」笹川監督布教師□三月廿一日廣島市於本願寺聽衆八十名「開會の辭に因みて」島田覺一君「宗教の本質」笹川監督布教師□三月廿二日吉田町於蓮華寺當寺檀家信徒は聖誕七百年紀念慶讚のために一寺には寺門の面目一新と經營に努め一面には大講演會を開き法燈を顯かすを唯一供養との意氣込なり聽衆約六百名「開會の辭」安田台城師「聖誕七百年」長美明師「誓願と啓發」笹川監督布教師□三月廿二日夜同所に於て聽衆千名「開會の辭」安田台城師「日本國の靈能」長美明師「日蓮主義と思想問題」笹川監督布教師□三月廿三日午前九時信徒の勤發により笹川當正の講演聽衆百七十名「宗教の體用」笹川監督布教師、已上

今回の監督布教は到る處長深の功果を收めたり最も一二箇所不成績の處ありしは遺憾なりしも畢竟するに教團生活の意義と當師の本分は宣傳にある事を遂知し努力の欠陷と見るの外なし、資力の缺乏を顧みず宣傳に努力する當師は地方在住の者に多きを見て轉た同情と敬眼に堪へざりし、予は不眠不休の態度を持し勇猛精進の經文の一分を服膺したる事を法悅とす。

□三月廿四日大阪於堂圓寺聖誕七百年記念慶讚大法要講演會頗る盛況なり「聖誕七百年慶讚の意義」京藤義應師「法華經の權威と人生觀」笹川監督布教師□三月廿五日午後一時福井縣下本宗寺院合同にて福井市妙經寺に於て聖誕七百年記念慶讚音樂天童大法要大講演會を開催す前夜石井宣俊梶木顯正の兩師は道路演說をなし一萬の宣傳ビラを撒布せり、當々野口權大當正大導師の下に莊嚴なる法要を虔修し了はりて講演會を同く「斯人行世間」窪田布教師「信行要義」木村日保師「日蓮聖人降誕の意義」野口權大當正□三月廿五日夜同所に於て「久遠の生命」梶木顯正師「法華經と聖日蓮」窪田布教師「化導の要師」笹川監督布教師「赤化せる露國より見たる日蓮主義」野口權大當正、當夜共降雨に拘らず非常の盛況にして將來教

運發展に資する處なり□三月廿六日金澤本宗寺院及同市天晴會合同にて聖誕七百年記念慶讚大法要大講演會を同市本長寺に於て開催、「日蓮聖人の教義」窪田純榮師「慈悲と智解」笹川監督布教師「法國冥合の光」野口權大當正□三月廿六日夜同所にて再開「人格化せる法華經」窪田布教師「赤化の露領と改造文明の標準」野口權大當正「日蓮主義の權威」笹川監督布教師、百萬石の金澤市は寺院の過剩より宗魔の惑ある本宗も窪田杉田石橋の三師水魚的協同一致の動作に出てつゝあれば他日必らずや復興の光を放つべし而して當日の參聽者に有識階級の多きを見るは求道要求の反響ならむ。

統一閣月報

二月五日夜、土曜講義。「四信五品鈔講義」木村日保師。「日蓮主義綱要」井村日成師。△同六日、日曜講演「人の心」高木日靖師。「身命を期とせん」山根日東師。「聖訓要義」本多總裁稅下。△十三日聖祖降誕記念大講演は三月發に掲載。△十二日土曜講義。「日蓮主義綱要」井村日成師、「國家と個人」小林文學士、「智目行足」村岡本量師。△十五日清明會「法華經講義」井村日成師。△十九日地明會「方便品要文講義」本多稅下。同日夜青年會「四信五品鈔講義」木村日保師、「日蓮主義綱要」井村日成師。△廿日日曜講演「佛陀の三方面」村岡本量師、「日蓮聖人出現の目的」關田日城師、「聖訓要義」本多稅下△廿二日夜清明會「法華經講義」井村日成師。△廿三日夜青年會「四信五品鈔講義」木村日保師、「日蓮主義綱要」井村日成師。△廿七日日曜講演「慈悲の御手」木村義明師、「法華經の行者とは如何なるものぞ」木村日保師、「聖訓要義」本多稅下○三月一日夜「法華經の論理觀」本多稅下。△五日夜青年會「日蓮主義綱要」井村日成師、「四信五品鈔」木村日保師。△六日日曜講演「日蓮聖人の涙」古谷幹夫師、「處世の要義」鈴木日雄師、「聖訓要義」本多稅下。△同日午後二時講妙會「法華經講義」本多稅下。△十二日夜青年會「御遺文講義」木村日保師、「日蓮主義綱要」井村日成師。△十三日日曜講演「人の心」大森日榮師、「遺時と僞正」井村日成師、「御聖誕と地涌大菩薩」野口日主師。△十九日夜青年會「日蓮主義綱要」井村日成師、「本尊と吾人との正しき連鎖」村岡本量師。△廿日日曜講演「佛教と人生問題」村岡本量師、「護惜建立」小西日喜師、「聖訓要義」本多稅下。△廿三日地明會「法華經講義」本多稅下。△廿六日夜「御遺文を精讀しての所感」本多稅下。△廿七日、日曜講演「吾はかく信ず」淺井玄哲君、「不惜身命の立行」村岡本量、「聖訓要義」本多稅下。

自慶會支部月報

○四月三日、名古屋市於縣會議事堂思想問題大講演會、「個性の尊重と社會の共存」協調會勞働課長、小林藏太郎氏、「生活の意義」小林一郎氏、「修養と自覺」本多稅下。此日三十年來稀有の大暴風雨にて市街を通る者も稀なれば聽衆如何かと思ひしに定刻迄に熱心なる志士二百餘名、森中將の發聲にて無事閉會せしは十時半○一日、山岸製材三百名、「生活の意義」小林文學士○二日、豐田本社千名。「生活の意義」小林文學士「修養の必要」國友文學士。○同日豐田織布押切工場。「生活の意義」小林文學士。「修養の要諦」國友文學士。○三日、

豐田織機、三百名。「東洋文化の特色」本多貶下「生活の意義」小林文學士○六日、三菱內燃機、三百五十名。「思想律」本多貶下○同日、日本車輌、八百五名、「道」本多貶下○八日、大阪市豐田織機會社、八百名、「正しき自覺」本多貶下○三月十四日、神戸市製鋼所、千五百名、「理想の勞働者」本多貶下○十五日、同所千五百名「健全なる自覺」本多貶下○同日夜、鈴木商店社員全部、「社會問題私見」本多貶下。

各地の思想戰

◎大阪通信　三月十六日於中島公會堂「同會の辭」小笠原理事、「神州民の使命」大迫大將、「五大部の精神」本多貶下、聽衆二千餘名△同夜東區於浪華小學校講堂、軍人分會主催大講演會「同會之辭」菅野分會長、「國民の覺悟」大迫大將、「誤れる思想家」本多貶下、聽衆千餘名△十七日夜於蓮成寺降誕記念法要及講演、熊井本光師、金光孝碩師出演、菅長貶下も御臨席さる△同夜於大紙倶樂部祖書要文講義、本多貶下、聽衆四百餘名△四月七日於同所御遺文講義、本多貶下△八日同所、御遺文講義、本多貶下、聽衆三百餘名。

◎名古屋支部　四月四日於常德寺御遺文講義、本多貶下、聽衆七百名△五日同寺御遺文講義、本多貶下、聽衆八百名。△四月二日、龜山在平野村(於伊東寅氏宅)日蓮主義大講演會、「人生と宗教」長谷川師、「思想問題と日蓮主義」本多貶下。村長以下有志及青年團員等加佐登驛に貶下を出迎へ、花火を打ち揭げて盛會を極めたり△同日夜四日市於諏訪公園圖書館樓上、法華經要文講義本多貶下△四日刈谷町公會堂に於て、聽衆千貳百名。「思想問題と日蓮主義」本多貶下。

「國民精神に就て」國友文學士△十七日瀨戸町於同町陳列館百五十名「精神修養に就て」國友文學士△十八日名古屋市古渡町於山田織工場六十名「親の心」川島常盟「國王の恩」兒玉常宣「人の心」國友文學士。△十九日刈谷町於長遠寺、「修養と信仰」國友文學士。

◎京都教報　三月一日於本山國禮會修行後「法悅約生活」今井乾亭師△二日於方丈護正會講演「法蓮鈔講讀」萩原部長△八日於成就院護正婦人會講演「婦德」有田安道師△同日夜於川東本性寺聖誕七百年記念講演會「同會之辭」金光師、「日蓮主義より見たる世界の大勢」杉村少將、「慈悲中心の佛教」萩原部長、聽衆百名△九日西洞院老村末永邸宅「思想問題に就て」土持師△十日於本正寺婦人會「奉讃に就て」金光師△十一日於本山講堂法華經要文講義「徹底せる信仰」萩原部長「法師功德品第十九」本多貶下△十二日於本山講堂、「神力品及囑累品講義」本多貶下△十五、六、七の夜間市內甫五ヶ所に亘り思想善導の目的を以、道路大宣傳を試み、萩原、金光、有田、土持、今井の各師奮動、十九日開催の聖誕記念大法要及大講演會の廣告葉三萬枚を散布す△十九日朝來より天氣晴朗風無く近來稀なる好天氣なり、午後一時に來集する參拜者數百名二時より本多管長貶下大導師の下に稚兒音樂の奉讃記念大法要を執行し、六時半より於市公會堂大講演會を開催す。聽衆千餘名、村雲日淨尼公の御臨席あり「開會之辭」金光師「聖祖御降誕の因緣」能仁事一師「聖祖記念と菩薩行」野口日主師「五大部の大精神」本多管長貶下。最後に杉村少將の發聲にて萬歲三唱、盛會裡に散會す。△十六日於法光院婦人會「生甲斐ある生活」金光師△十八日於本山彼岸會法要後「彼岸因緣と修行」土持師△廿一日彼岸法要後「正しき信仰に生きよ」萩原部長△

廿四日於本山彼岸結日法要終行後「現安後善」金光師△廿二日於本正寺「不惜身命」金光師△同日午後於久遠寺「日經上人の御德」有田師△廿四日於木津妙樂寺聖祖降誕記念大講演、此夜灯燈を應用して二師熱辯を振ふ聽衆滿堂「上行の自覺」三谷師「御降誕奉祝の眞意義」有田師。

◎神戸教報　三月十三日はちす婦人會△同日夜於勤業館「法華經要文講義」本多貶下△十四日同所「法華經要文講義」本多貶下。

◎常總統一團　三月十五日於銚子町第二部小學校聖祖降誕記念講演「同會」時友太助「宗教信仰と國民生活」成島支部長「赤化の露顯を見て大日本主義に及ぶ」野口日主師△十六日鹿島郡太田於長照寺「同會」成島支部長「思想の中堅」野口日主師、聽衆五百餘。

◎和氣通信　三月二日夜、神模村上金兵衛宅「聖誕七百年」原田日勇△五日夜山田村須波廣吉方「聖誕七百年」原田師△十日夜於曾根護法會「大橋太郎」原田師△十二日小瀨水平松朝太郎宅「聖誕七百年」原田師△十四日於本成寺婦人會「宗祖降誕の因緣」原田師△十五日晝於弓削小學校民力涵養講演「村治上に就て」矢部村長、「共同作業」石井縣議、「國民自覺の秋」原田師△同夜於本成寺同信會「宗祖の活動史」原田師△十八日夜彼岸初日「久遠の生命」原田師△廿一日夜彼岸中日「涅槃の樂」原田師△廿四日彼岸結日「釋尊と提婆」原田師△廿八日天瀨公會堂「靈山童子」原田師△廿日晝於和氣小學校處女會發會「同會の辭」新置校長、「祝辭」日笠町長、「處女の處世に就て」原田師。

◎津山通信　三月一日夜、於林田村同信會△十日午後於加美村婦人會能仁一十師講演△十二日夜於津山布教所「樂みと慎み」能仁一十△廿二日午後於本蓮寺「心の明時」能仁一十師△廿七日夜於弘道所「教」能仁一十師△廿八日夜於上ノ町布教所聖誕七百年記念講演會「惟神道と日蓮主義」山本駒一、「聖誕七百年に際して」和氣善勝「聖祖日蓮降誕の二大使命」能仁一十師「日蓮上人降誕の因緣」能仁事一師、此夜「降誕記念號」三百五十部謄本す△廿九日午前於加美村小學校及報德會講演「東西文明と國民道德」能仁一十師「國民氣風の洗練」能仁事一師△廿九日午後夜於久米郡銀行樓上「南無妙法蓮華經」能仁一十師、「日蓮主義の要諦」能仁事一師。

◎明石通信　四月二日晝明石看護婦會「生活と宗教」川崎英照△四日橋香會例會「現代思想と法華經」川崎師△十日法華經講義例會、川崎師△十二日於公會堂日蓮主義青年會例會「宗教心の發生」川崎師△十五日於公會堂明石婦人會發會式を祭ぐ「現代婦人の修養に就て」川崎英照。

◎伯耆通信　二月十六日於松崎本立寺聖誕七百年記念大講演「日蓮上人ノ御一代」石指惠倫「上人ヲ思フ」安達惠宏「眞日蓮主義」廣瀨信光「聽法の益」富田日進△十九日於松崎小學校聽衆七十名「心の寶第一」富田師△廿日於花見村小學校「佛教と生活」富田師△廿日夜於市橋宅「修養の第一義」林慶順「修養と信仰」桔梗會草「日項上人の追懷」安達惠宏「上人の理想」石指惠倫「日蓮上人の慈悲」星川眞雄「釋迦牟尼傳」富田師△三月一日市橋宅「釋迦牟尼傳」富田師△廿一日於松崎本立寺「六波羅密」河原龍雲「心の寶第一」富田師△廿五日青谷町於日蓮宗教會所聖誕記念講演會「門下としての覺悟」富田師「四恩に就いて」新名泰雄「日蓮主義眞髓」富田日進能二ヶ所に於て講演す。

統合宗學林學監
統一團總務　僧正　井村日咸述

日蓮聖人の宗旨

日蓮聖人御影壹葉
三六版七十六頁總ルビ
壹部定價金拾五錢也
施本　五十部以上　拾四錢
特用　百部以上　拾參錢
價　三百部以上　拾貳錢
五百部以上　拾壹錢

本書は著者が統一團青年會員の爲に口述し雜誌『統一』誌上に連載せられたる日蓮聖人教義綱要の總論を整束したるものにして日蓮主義を最も平易簡明に記述し其要領を會得せしめたるものなり、茲年日蓮聖人降誕第七百年報恩の爲に之を上梓し初版は著者存緣の道俗に法施したり、今回此を再版に附し施本用には特價を以て汎く之を頒賣す、希望の向は本團に御申込を乞ふ。

大正十年四月

發賣所　東京市淺草區北清島町十四番地　統一閣
電話下谷六三一〇番
振替東京一二一九番

本多日生猊下著書一覽

○法華經の心髓　金壹圓六拾錢
○日蓮主義初步　金七拾錢
○日蓮主義　金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○國民道德と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要　金貳圓貳拾錢
○日蓮聖人の感激　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義の運用　金貳圓五拾錢
○東洋文明の權威　金貳圓貳拾錢
○國民教化　金貳圓貳拾錢
○法幢　金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶　金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經　金貳圓
○聖訓要義　各卷壹部金貳圓貳拾錢
○開目抄詳解　上卷一部金貳圓八拾錢
○聖語錄　金貳圓八拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢
以上各送料一部金八錢
○法華經講義　上卷下卷各一部金拾八錢　送料一部金參圓四拾錢
○大藏經要義　一部金參圓八拾錢十一卷迄既刊　送料一部金十八錢半年前金送料不要
○法華經要文　送料一部金貳錢
上製參拾錢　金五拾錢　送料一部金貳錢

○思想の惡化善化の基礎（各一部金六錢百部以上金五錢の割　送料一部金貳錢）
○人類文明の基礎
○正しき理解と信念
○日蓮上人の功勳　一部金十錢郵稅金五厘
○日蓮上人降誕七百年　一部金拾錢郵稅金五厘
以上購讀希望の方は左記へ申込まるべし
東京市外品川町妙國寺內
大藏經要義刊行會
振替東京三一五九六番

統一定價

一冊	金參拾錢
一ヶ年	金參圓參拾錢
	送料一錢
	送料共

廣告料

一頁	金拾圓
半頁	金六圓
四分ノ一頁	金參圓半
前金の事	

本誌に限り一部定價金十錢郵稅金五厘百部以上二割引施本用に御使用の方には三割引○送料實費

大正十年四月廿七日印刷納本
大正十年五月一日發行
（第三百十五號）
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
編輯兼發行人　國友日斌
印刷人　鈴木日雄
東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　統一發行所
振替東京五一〇七一番
名古屋市中區新榮町四丁目十五番地常德寺內
編輯所　統一編輯所

不許複製

目次

開宗の事實及び理想（時言）……本多日生
能全思想とは何ぞ（法筵）……本多日生
教育勅語と思想問題……本多日生
本經祖書要文講義……本多日生
日蓮聖人教義綱要……井村日成
宗門史料……山根日東
記事報道十數件

第廿五年六月號